



384
13

始



納
本

384-13

法學博士
文學博士

有賀長雄著



支那

正觀

全

大正

7. 11. 27

内交

東京
外交時報社發行

序

去る明治十八年、余文學叢書の第一卷を以て文學論を著し、同第二卷を以て孔門哲學或問を世に公にしたり。爾來茲に三十年、未だ曾て志を文の理想の研究より離したること無し。常に以爲へらく、支那を中心とする文の理想は、是れ東洋の天地を經緯する一大思想にして、其の重要なることは、西洋の近世を支配する科學の思想に譲ること無し。又常に信ずらく、文の理想の今日に重要視せられざるは、是れ唯だ一時の現象のみ、將來必ず科學と並行して世界の二大思想たるの期あらん。最近六年

間、余は民國の招聘に應じて北京に寓居し、親しく彼地の制度文物を觀察し、支那國民團結の基礎を爲せるものは實に此の文の理想に外ならざることを實地に就き確むることを得たり。因て試みに余の年來文の理想に就き抱持する所を述べ、題して支那正觀と曰ひ、以て彼地知友の鑑正を請ひたるに、皆之を是とし、教育部内に於ては、此の思想を以て少年子弟の教科書に加へんと擬する者すらありき。今又之を以て本邦の識者に質す爲め、外交時報社に托して刊行し、附するに其の漢譯文を以てしたり。而して余が三十年前に於ける二著は、既に絶版に屬する

を以て、之を卷尾に附録し、以て余が思想の今昔一貫せることを證すと云爾。

大正七年九月

著 者 識

支那正觀

目次

第一節	序言	一
第二節	世界無比の文明繼紹	三
第三節	西洋文明と支那文明との對比	八
第四節	支那國民文の理想の沿革	二〇
第五節	文明繼紹の第一方便(歴史)	三五
第六節	文明繼紹の第二方便(文學)	四二
第七節	文明繼紹の第三方便(金石)	四八

第八節 支那文明と日本文明との關係……………五四

第九節 支那文明と日本文明との差違……………六六

第十節 結論……………七五

後藤文學士批評……………八一

漢譯支那正觀

第一節 序言……………八五

第二節 世界無比之文明繼紹……………八六

第三節 西洋文明與支那文明之對比……………八九

第四節 支那國民文的理想之沿革……………九七

第五節 文明繼紹之第一方便(歴史)……………一〇七

第六節 文明繼紹之第二方便(文學)……………一一一

第七節 文明繼紹之第三方便(金石)……………一二四

第八節 支那文明與日本文明之關係……………一二九

第九節 支那文明與日本文明之差異……………一三六

第十節 結論……………一三二

附錄

第一、文學論

緒言……………一四一

第一節 西洋の開化は理學に因る事……………一四三

第二節 理學十分の文化を致すに足らざる事……………一四四

第三節 綱紀を理學に因て正すの不當なる事……………一四六

第四節 西洋の倫理、政理、法理、萬古不易なる能はざる事……一五〇

第五節 保合に因て綱紀を正すの正當なる事……一五四

第六節 保合美なる事……一五八

第七節 保合美なるが故に大なる事……一六五

第八節 保合大なるが故に誠なる事……一六七

第九節 保合誠なるが故に利なる事……一七〇

第十節 人の性命は大和を文章に現すに在り……一七一

結論……一七八

第二、聖門哲學論

第一節 哲學上の四大問題……一八五

第二節 保合分解の二論法……一九〇

第三節 乾道總釋……一九五

第四節 保合論法を人倫に應用す即ち仁義禮智の四徳……二〇一

第五節 保合論法を天下文明の次第に應用す……二〇六

支那正觀目次終

支那正觀

第一節

序言

法學博士 有賀長雄著

個人間の交友は互に他の性質を理會するに因り始めて能く親善なるが如く、國民間の交際も亦互に他の精神を理會するに因り始めて能く眞に親善なるべし。或は經濟上の利益、或は軍事上の便宜の爲に結ぶ所のものは一時の皮相の親善のみ、兩國國民の心魂より湧出する永

久の親善に非ず。所謂國民の精神は、一定の國土内に住する民族が團結して一個の國民を爲せる所以の中心の事實是れなり。日本民族が團結して日本國民を爲せる所以の中心の事實は、其の皇統連綿の皇室を奉戴するに在り、支那民族が團結して支那國民を爲せる所以の中心の事實は、其の四千年來同一の文明を繼紹して今日に至れるに在り。日本の價值は其の民族が開國以來同一の皇室を戴き、其の下に聚まりて國民を爲せるに在る如く、支那の價值は其の民族が世界何れの國の文明よりも古き文明を繼紹保存し、之を以て團結して其の國民として

の存立を維持するに在り。日本國民の精神は世界無比の皇統連綿に在る如く、支那國民の精神は世界無比の文明繼紹に在り。互に此の偉大なる事實の由來及其の結果を會得するに由り、互に他の精神を理會するを得べく、而して後始めて日支の親善を談すべきなり。

第二節 世界無比の文明繼紹

世界の歴史に古代の文明多し、即ち印度文明、埃及文明、亞叙利文明、巴比崙文明、イスラエル(猶太)文明、フニキア文明、波斯文明、希臘文明、羅馬文明の如き是れなり。然りと雖、此等の古代文明は各、幾百千年に亘る盛衰の歴史ありた

る後、其の國民の衰亡と俱に死滅し、今日に於ては僅に芻狗をなし、唯だ考古學上の研究材料を供するのみ。獨り支那の文明は然らず、四千年前より今日に至るまで、其の國民としての存立に斷絶なきと同時に、其の文明も亦古代に於て隆盛なりしものを其のまゝ傳へて今日に至れり。而して時代の推移に應じて固より多少の汗隆は免れざりしも、其の本質は古今同一なり。是に於て今日の支那國民の支那文明に對する關係は、例へば今日の希臘國民の古代の希臘文明に對する關係とは全く同じからず、希臘國民は其の文明の隆盛時代より今日に至る間に

於て、或は羅馬東方帝國の管轄に歸し、或はオトマン帝國の統治を受け、又或る時は「スラヴ」民族の侵襲を被りたり。其の爲め人種、言語、風俗、人文大に變化し、現今に至りては唯だ古代の希臘人が住したる土地に住すこと云ふの外、古代の希臘文明とは殆ど全く没交渉なり。又例へば今日の埃及人の如き、地理上より云へば依然たる埃及人なり。雖、古代の埃及人の眞の子孫に非ず、眞の子孫は唯だナイル左岸の「クフト」と稱する一村落に於て之を見るべきのみ、一般の埃及人は相尋て波斯人、希臘人、回教民族及土耳格帝國の征服を被り、爲に甚しく異種民族の血を混入

し、唯だ僅に頭蓋骨の形状に於て古代の埃及人の痕跡を認むるに止まるご云ふ。今日の支那國民は則ち然らず、彼等は明かに古代の支那國民の子孫なり、而して四千年の久しき間に他民族の征服を被りたる歴史一再にして止まらずと雖、之が爲めに其の國民としての存立を傷けず、常に其の文明の力に依り優に自ら支持するごを得たり。換言せば、武力を以て支那國民を征服し得たる異種民族は、却て支那國民の文明の力に因り同化せられ、大抵二三世の後には全く支那民族中に埋没して其の痕跡を認む可からざるに至れり。即ち匈奴の如き、突厥の如き

蒙古人(金遼)の如き、滿洲人の如き是れなり。此の如き事情に由り、支那國民は其の古代文明の力に因り常に自ら其の存立を維持し、同一の文明を累世繼紹して今日に至れり。此の如きは世界の他の國民の間に於て絶えて其の比類を見ざる所なり。余は東西兩洋の識者が此の偉大なる事實に着眼するの遲きを怪み、世界歴史に於ける此の偉大なる事實を稱して古代文明の無比繼紹と謂ひ、我が日本國民の特有せる皇統連綿と卓然並峙せしめんと欲す。爰に以下數節に於て其の原因及其の結果を考察す。

第三節 西洋文明と支那文明との對比

西洋各國今日の文明の雄大なる所以は、科學に根基す。科學の未だ發達せざる歐洲中古の文明は、支那古代の文明よりも其の程度低く寧ろ之に劣りたり。而るに第十世紀以後西洋各國民は長足の進歩を爲し、實力に於て東洋の文明國民を壓倒するに至りたる所以のもの、一に各種事業の範圍に於ける科學上の發明の偉大なる効力に因るなり。火藥の發明は封建の戰術を打破して世態を一變し、蒸氣機關の發明と電氣の應用とは地球表面の距離を短縮して世界の面目を一新し、化學及物理學の範

圍に於ける種々の發見は東西國民の生活狀態に一大革命を起したり。

科學の範圍廣しと雖、其の用ゐる所の研究方法は一のみ、即ち分析及概括是れなり、而して分析と概括とは互に相待ちて行はるゝものなれば、其の實は二にして一なり。

分析とは一種の物體を分解して其の成立の要素を知り、或は一定の現象を分解して其の間に於ける原因結果の關係を知るを謂ひ、概括とは分析に因り知り得たる多くの事實を對照して其一致するものを拔萃し、相違するものを省除し、以て自然界に於ける理法と爲すを謂ふ。化

學者は各種の物體を分析して之を其の原素に歸し、各種原素が他種の原素と結合して生ずる結果を概括して以て化學上の理法と爲せり。物理學者は物體の變化を分析して之を一定の原力に歸し、一種の原力(例へば熱)が物體の上に及ぼす變化、又は甲種の原力(例へば電氣)が變じて乙種の原力(例へば運動)と爲る關係を概括して物理學上の理法と爲せり。經濟學者は貿易市場の現象を分析して物價の高下する原因を發見し、以て物價を支配する所の理法と爲せり。生理學者は生物の肉體を解剖して其の臟機の組織及官能を知り、各種藥石の之に及ぼす効

果を概括して以て醫學の法則と爲せり。物質界に於ける分析概括の用は大なりと謂ふ可し。支那古代に行はれたる所亦此の法に依るもの無きに非ず、例へば神農氏始味草木之滋、察其寒温平熱之性、辨其君臣佐使之義、神而化之、遂作方書以療民疾」と云へる如き、頗る今日の藥劑學に類するものあり。又史記の扁鵲傳を讀めば、黃帝の時の名醫俞跗が診病施術は、今日の解剖學と合致するものあるを知るべし。火藥は初め支那に於て發明したる所なりと云ふ説眞に近く、仙家煉丹の術中には今日の化學上の發明と符合するもの多からん。

然りと雖、支那文明の根基する所は分析概括に在るに非ずして自ら他に在り、保合是れなり。科學の威力全世界を壓倒し、各國之に依り富強を競へる今日に生息する者は、分析の効能を信ずること過大にして、分析法を以てせば何事か爲し得ざらんと思惟すること自然の勢なり。従て化學に根基せざる支那の文明を輕視し、西洋の文明に比して劣等なりと爲す傾きあり。然りと雖、獨り分析のみ人類文明の基礎を爲すに非ず、之に反對する保合の作用も亦其の一大要因たることを知らざるべからず。保合とは數個の異物を結合せしめ、其の間に於ける調和

の關係に因り新しき事物を生ぜしむるを謂ふ。而して保合若し其の宜しきを得ば之に因り生ずる所の物は必ず人類をして美の感を起さしむ、之を保合の美と云ふ。保合美の最も解し易き一例は音樂に在り、即ち律呂に考へて善く調和する甲乙二音を合奏するとき、甲にも非ず乙にも非ざる丙の美音を生ず、因て俗話には保合の美を音樂に譬へて調和の美と云へり、調和は音學の語なり。丙の一音を分析せば唯だ甲乙の二音あるのみ、而して調和の美は消散せり、知るべし分析の調和に用なきや。繪畫に於ても亦然り、一面の繪畫を分析せば唯だ描法と設

色と濃淡とあるのみ、然れども一旦美術家の天才を以て此の三者を保合するときは、或は山水と爲り或は花鳥と爲りて美觀を呈せり、然れども眞に山水花鳥あるに非ず、是れ唯だ描法設色濃淡の間に於ける調和の關係のみ。文學上の産物に至りても亦此の如し、詩文を分析せば唯だ文字と章句とあるのみ、然れども文人の天才を以て巧に之を布置結構するときは李杜の詩賦と爲り、韓柳の文章と爲りて、鬼神を哭せしめ、世道人心を裨益せり。建築物も亦是れ純然たる保合の産物なり。吾人は家屋殿堂と云ふが如き名詞を速了して、眞に家屋殿堂なる實物あ

りと思惟せり、何ぞ知らん、實物として唯だ木材瓦石壁土、釘鋸あるのみ、家屋殿堂は此等の建築用材の保合に因りて生ぜし調和の關係に外ならざるなり。凡そ人類の製作する所、之を大にしては一國政治の機關より、之を小にしては衣服器用の末に至るまで、保合の産物に非ざるなし。特に驚歎すべきは、所謂時代の産物なり。同一の時勢久しく繼續する間には社會の事物自然に相調和し、其の時代の特色を帯びたる各種の事物を生ずるに至る、而して其の趣味風格は他の時代のものご必ず異なるが故に、一見して其の何れの時代のものなるかを知るを得

べし、之を其の時代の産物と云ふなり。但し時代の産物あるは必ずしも泰平の時のみに限らず、亂世は又亂世の産物あり、例へば南宋徽宗皇帝の時代及我が國の室町時代は決して泰平の世に非ず、然れども共に優秀なる産物ありたるにあらずや。要は唯だ四圍の事情に因り社會の事物が善く調和すると否に在るのみ。若し一大有力者上に在りて其の權威の下に事物を調和せしむるときは、其の時代の産物は特に優秀なること歴史に多し、例へば清朝の極盛なりし乾隆時代、徳川氏の全盛なりし元祿時代の産物の如し。

更に眼界を放ちて達觀すれば、自然の物體は皆自然界の調和の産物なり、即ち風雨寒暑、地味の調和は禽獸草木の繁殖と爲り、一男一女陰陽の調和は子孫の繁殖となる、而して風雨、寒暑、地味の調和の原由する所を尋ねれば、是れ日月星辰の運行に於ける調和の産物に外ならず、知る可し保合の美は人類の社會と天地自然とを貫通する大道なることを。

支那古來の文明は保合の美に因り其の偉大なる所以を致せるものなり、是れ猶ほ西洋近世の文明は分析の精に因り其の偉大なる所以を致せるが如し。且夫れ「文明」な

る文字は分析の産物たる西洋の文明よりも、保合の産物たる支那の文明を言ひ現はすに善く適當したるものなり。西洋語の文明「シヴィリゼーション」は拉甸語の「シヴィリス」即ち都人士的に云ふ意味の字より來り、鄙野の風より化して都會の風と爲るを云ふなり。支那語の文明は易の文言の天下文明より來る、天下文明とは人文、即ち人間社會に於ける事物の調和關係の明著なるに至るを謂ふなり。實に文の一字は古來支那國民の精神を支配すること、今日の科學即ち「サイエンス」なる一字が西洋各國民の思想を支配するより以上に有力なるものなり。詩經に

「允文允武」と云ひ、尙書に「文思安安」と云ひ、易に「觀乎人文以化成天下」と云ひ、論語に「天之未喪斯文」と云ひ、「行有餘力則以學文」と云へるは、決して文詞の文を指すに非ず、更に深淵、更に遠大なる旨趣ありて、人世事物の調和を指すものたるや明なり。文武と並べ言ふときは、文は人世調和の工夫を云ひ、武は此の調和を妨害するものあるとき實力を以て之を排除するを謂ふ。支那の理想よりすれば、善く天下を治むる者は必ず此の兩徳を具するを要す、文思安安は、社會調和の工夫に於て苦心の跡なく、平易に之を爲し得るの義に非ざるを得んや。

第四節 支那國民文の理想の沿革

支那國民は古今を通じて保合の美、即ち文を以て理想とし、此の理想の裏に生活する愉快なる國民なり。文の理想の極處は大和保合なり。今之を簡易に説明せば人類は他の生物と一般、天地自然の間に於ける調和の産物なり。然りと雖、他の生物と異なり、靈智を備へて自ら調和を工夫するの能力あり。故に人類の聚合して組織する所の社會にも亦必ず調和あるべく、且此の調和は動植物を生じたる寒暑、風雨、地味の調和、及此の調和を生じたる日月星辰、即ち大宇宙の調和と相容れ相通ずるものなら

ざるべからずと云ふに歸著す。斯く天地に通ずるの調和を人間社會の内に現實して各人其の一分子と爲るは、即ち是れ支那國民の道德の本義なり。社會調和を工夫する天才あり、且身を以て衆を率ゐて其の工夫する所の調和に適したる社會組織を爲さしむるの徳あり、智ある人を指して聖人君子と云ふ。聖人は其の徳を稱し、君子は其の智を揚ぐるのみ、共に支那國民の理想的偉人にして、大和を保合するの能力ある者なり。過去の聖人君子の事跡に考へて、大和保合の工夫の存する所を審にし、之を言語に述べて以て人に教ふるを儒者の本分とす。儒者

の泰斗たる孔夫子は、唐虞三代の事跡に考へて、其の詔勅及制度を編述して尙書と爲し、又聖人の治下に在り社會調和の美に鼓腹したる臣民が、或は盛徳を謳歌し、或は善政美俗を贊揚せし雅頌正風を主とし、夫の先王の遺澤に醇化せられたる逐臣棄妻が自然の性情を詠出したる眞詩を選びて詩經と爲し、以て修齊治平の龜鑑と爲せり。夫の變風百三十五篇の如きに至りては、怨刺すれども禮義に止まるが故に是れ亦社會調和を慫慂する所以なり。然りと雖若し同一の社會調和を以て永く人心を束縛するときは靈智衰へ却て亂離の原因と爲る、因て古の聖

人は調和と同時に變通の工夫に苦心したり。支那の上古に調和及變通の理を圖を以て抽象的に開示せんことを試みたる一書あり、或は是れ支那以前の文明國民一説にカヤルデヤ人より傳ふる所なるやも知る可からず、頗る難解なり。周の文王及周公は或る程度まで此の書を解して之に解釋を付したり、然れども未だ十分ならざるを以て、孔夫子更に研究して之に十種の註解を試みたるもの即ち是れ易經なり。孔夫子は社會の調和不調和の由て分るゝ所、人々の行爲に在ることを具體的に示す爲め、魯の史官の手に成りたる歴史を筆削修正し、當時の諸侯の調和に益ある

行爲は之を褒め、害ある行爲は之を貶して、極めて謹嚴なる批判を下し、以て春秋を作れり。孔夫子が以上四種の書を作りて之を弟子に授けたるより、社會調和の理想始めて完形あり、以て後世に傳へ得べきものと爲れり。因て孔夫子の業を稱して集大成と云ふ。然りと雖、支那國民の腦裏に收藏する所の調和の理想は決して孔夫子及其の學派の製作に非ず、永き時代を追ひて自然に發展し、代々の聖主及賢人の工夫に因り補修せられて今日に至れるものなり。

周末諸侯の中には孔夫子の理想を採用して之に依り政治を行ひたる者なし。秦の始皇帝、専ら威武を恃み、人心を收攬するこそを爲さざりしに因り、其の統一は一代にして破れたり。此の事實は爾來天下に君たらんとする者をして大に鑑みる所あらしめたり。漢の高祖、叔孫通、陸賈等の策を用ひ、先づ朝廷の儀禮より入りて朝臣に社會調和の美を示したるに、其の效果顯著なるものありたり。武帝に至り大に儒教を興し、京師に大學を設けて文即ち社會調和の工夫を教ふる所と爲したり。當時政府の採用したる社會調和の工夫が如何に綿密なりしかは三禮の編纂に依りて之を見るべし。周禮儀禮は周公の

作を爲すも、夫の周末秦漢時代の諸儒の禮説を輯めたる禮記と共に漢時代の編纂なることは明なり。漢の統一は中途にして一旦弛み、又興りて四百年の後遂に破れしが、社會調和の理想は之と共に亡びず、三國の時は變亂特に甚だしく、之が爲に世人が社會の調和を追慕する念は却て深酷なるに至れり。然れども調和を實現せしむることは甚だ困難なりしに因り、文詞の上に於ける調和の美を以て僅に自ら満足するに至れり。暴風疾雷の木を抜き岩を摧くを見ては自然の調和を追想する切なるが如く世態の變亂劇烈なるときは社會調和を思ふの情切

に動き、之を事實に求めて得難きに倦み、之を文筆に求めて羨望の情を慰めたり、即ち亂世を距る遠からざる西晋に於て風流韻士の輩出せし所以なり。郭璞の詩藻、陶淵明の歸去來辭、王羲之の蘭亭修禊序等皆此の當時の産物なり。蘭亭修禊序の偉大なる所以のものは他なし、其の人品、其の境遇、其の文章、其の書態に於て當時の不調和なる社會の外に超越し、雄大なる調和の美を現はせばなり。即ち孔夫子に由りて大成せられたる支那國民の理想が三國以後の變亂に因り醞釀せられて、高尚優雅なる支那文學を形成するに至りしは此の時代の事に屬す。

唐朝二百八十九年の統一は李淵世民父子が南北朝時代の社會分裂の後を承け、調和の理想を以て團結を恢復するここに成功したるの結果なり。唐起り七年にして天下大に定まり、州縣郷に令して學校を設けしめ、天子親ら國學に詣り先聖先師を釋奠したり。世民の尙ほ秦王たりし時より文學の士を延き、杜如晦、房玄齡、虞世南、陸德明、孔穎達等十八名を以て文學館の學士と爲し、之を三番に分ち更日宿直せしめ、世民暇日には輒ち館中に至り文籍を討論し以て社會調和の工夫に資したりと傳ふ。世民位に即くの後弘文館を置き、四部經書、史書、子書、文集二十餘萬卷を聚

め、天下文學の士を集め聽朝の餘暇學士を内殿に引き、之と前言往行を講論し政治を商榷したり。此の時に當てや未だ政治と文學との別あらず、文籍に依り人の前言往行を見て、其の社會調和に益あるや否やを研究し、直に之を政治に施したるなり。一篇の貞觀政要は此の如き研究の結果を叙述したるものなり。貞觀十四年、太宗自ら國子監に幸し釋奠したり、而して天下の名儒を徵して之を學官と爲し學生の一經に通ずる者は皆官に補し、四方の學士京師に雲集す、即ち是れ儒教の黄金時代なり。玄宗以後唐の統治弛み、一旦五代及十國の分裂時代と爲

りしが、宋の太宗に至り、再び孔教を以て統一の基礎と爲し成功したり。宋朝佐命の臣趙普、常に一部の論語を手にして政治に資し、半部を以て太祖の天下を定むるを助け、半部を以て太宗を佐けて太平を致さしめたるは歴史に著名なる事實なり。太祖德行孝悌を舉げ制科を親策し、覆試の法を嚴にし、殿に御して進士を親試したり。太宗に至り崇文院を建て、孔子四十四世の孫孔宜(字は不疑)を文宣公に襲封したり。眞宗國中の州城に詔して孔子廟を作らしめ、曲阜に幸し孔廟に謁し、孔子の諡を改めて元聖文宣王と曰ふ。儒學は宋朝に至りて時に禪に入り、深く

理窟を窺ひ、思鬼神に通じ、能く漢學の外に於て自ら宗派を成し近代の哲學と往々暗合するものあり、淵源沫まず良に其の故あるなり。

短命なりし元朝の統一は即ち支那國民の社會調和の理に非凡なる同化力あることを證明するものに外ならず、何となれば强悍無雙の蒙古人は武力に於て能く支那國民に勝つことを得たりと雖、精神上に於ては却て支那國民の爲に敗られ、其の固有の言語風俗習慣を失ひて、全然支那民族中に埋没したればなり。

明朝に至り漢民族は社會調和の理想を以て再び一般の

支那國民を統一することを得たり、經義を以て士人を範圍し、科擧の制最も盛に行はる、儒教の人心統一に大効ありしこと以て見るべし。儒教の何たるを解せざる西洋人は、科擧の制を以て甚だしく支那の進歩を阻害したるものご爲すご雖、是れ唯だ其の害を知りて未だ其の利を知らざるものなり。科擧の眞目的は志願者が如何に善く經書の義理に通ずるか、又は如何に詩文を善くするかを檢定するに在るに非ずして、如何に十分に社會調和の美を感得するかを檢定するに在り。官吏たらんとする者果して能く經書に於ける社會調和の美を感得し、詩文

を以て其の調和を思ふの念を述ぶることを得るに於ては、必ず奮つて己も亦其の時代の文、即ち社會調和に貢獻せんご努力するなるべく、是に於て自ら卑劣俗悪なる行爲を爲さざるに至るべし、科擧に由り人を取るの利益一に此に在り。近世に至りても科擧の中より曾國藩、李鴻章、張之洞の如き大人物を出し、以て支那の衰亡を防止するここを得たるは一に科擧の賜なり。善く社會調和の美を感得する者を布衣より擧げて、其の才徳に應じ之に官を授け、非凡の才徳ある者は之を中央政府の大官に任じて國政を料理せしむるは是れ世界に比類なき善美な

る制度なり。惟ふに支那國民が最近の五百年、即ち東洋航路の發見せられしより以來、常に西洋國民の激しき壓迫を受けながら、能く之に對抗して其の國民的團結を保持することを得たる所以のもの、一に科擧の制に之れ因るなり。

以上の如く周以後の事實を歴史的に考究し來たるごきは、支那國民が世界最古の國民たりながら、中途に於て一の斷絶なく、能く其の國民として存立を、其の古來の文明と俱に、繼紹して今日に至れる所以のもの、一に國民團結の基礎たる社會調和の理想の偉大なる保合力と同化

力とに在るごき明なり。由是觀之、文明繼紹の一事が支那國民の間に在りて絶大の事實たるごき、皇統連綿が日本國民の間に在りて絶大の事實たるに譲らざるなり。支那を知らんご欲する者は此の大事實を蔑視して可ならんや。

第五節 文明繼紹の第一方便(歴史)

支那國民は果し如何なる方法に由り其の最古の文明を斯く久しく繼紹することを得たるやを尋ぬるに、其の主なる原因三あり、本節に於ては支那文明に於ける歴史の特殊の意味及効用を述べ。

支那國民の歴史に關する觀念は日本及西洋各國民の歴史に關する觀念と全く相同じからず、日本及西洋各國の觀念に依れば、歴史は國民生活の上に相次て起る事實の記録なり、支那の歴史の目的とする所は、各時代の事實を其の時代の人文の一分子として記録するに在り、日本及西洋歴史家の本領は事實を事實として誠實に記述するに在り、支那歴史家の努むる所は、其の時代の國民が建設したる社會の調和又は不調和の情勢を誠實に描出するに在り。支那有識者の考よりすれば、各時代の君主、人臣、學者、藝術家、逸民、殖財家等は皆相寄りて其の時代の人文

を構成せり、而して其の構成の次第を記述するもの即ち是れ歴史なり。委しく言へば、凡そ國民は其の時代に由りて生活の境遇を異にするものなり、而して其の天才を以て此の境遇の上に發動し、以て其の時代の人文を作り出せり、此の人文作出の顛末を記述するもの即ち是れ歴史なり。支那歴史の理想の此に存することは、太史公の史記編纂法並に兩漢書以下代々の歴史の編纂法に依りて明なり。

支那國民の歴史の理想と密接の關係あるものは支那より傳來して我が日本にも行はる、年號是れなり。年號

を立て時々之を變更することに付ては古來典例あり、君主交代するときは改元し、天文革命の運に際するときは改元し、國に祥瑞あり又は凶事あるときは改元す、然れども余を以て之を見るときは年號の用は人文推移の上的一段落を畫するに在り。社會調和の美は一律平坦に連續する能はざるこそ、猶ほ文章や戯曲の平板的に連續するこそ能はざるが如し。社會の調和一定の年數に亙り連續し、漸く衰運に向ふときは、局面を一變して人心を新にし、以て新しき調和に向て進まんことを要す、是れ改元の目的に非ざるを得んや。

茲に支那國民の歴史觀念に付注目すべき一點あり、即ち歴史が國民の品性上に及ぼす威力の大なること、是れなり。支那の國體に於ては社會調和の理想より重大なるもの無し、而して此調和は其の時代に世に在りし人々の貢獻する所に待つものなり。因て支那國民中の廉耻を知る者は、皆芳名を百世に留むるを以て無上の榮と爲し、臭を萬年に遺すを以て莫大の辱と爲す。事業又は學問を以て其の時代の人文に貢獻する所多き者は、特に文忠公、文節公、文獻公、文襄公、文敏公、文勤公等の稱號を贈られ、之を以て歴史中の人と爲る、是れ支那人が無上の名譽とす

る所なり。此の一事が支那の政治家の品性上に大なる影響を及ぼすことは余自ら之を経験したり。曾て民國四年の帝政運動起るや、多くの知名の人士は此の事の爲に甚しく苦悶し、進退に迷ひたる者少なからず、其の故他なし、當時の人文に有益の行爲ありたる者として史傳に列せられ、芳を後昆に流すか、將た有害の行爲として筆誅せられ、臭を千古に遺すかは、袁氏が成功するに否に由りて分れ、而して此の成否は當時頗る豫知し難かりしを以てなり。此の如く支那上流の人士が歴史に於ける自己の地位を顧念するの深きことは、自ら彼等をして善に

就き悪を去らしむるの原因と爲る、此の如きは世界の他の國民の間に決して其の類例を見ざる所なり。

支那國民は毎朝の國史編纂を重大視すること殆ど吾人の豫想外に在り、是れ亦歴史が人文繼紹の一大原因たる證據なり。國史編纂の爲め特に官衙を設け、一代の學者を擧げて之に従事せしむること支那政府の要件に屬し、何れの世に於ても之を等閑に付せしこと無し。現在の共和政府は總べて前清の遺物に對して故さらに力を保存に竭さざるに拘らず、經費を割きて清史館と國史館とを並び設けたり(近日經費節減の爲一時之を文科大學中

に合併したるも之を撤廢せしに非ず其の故他なし、今日の共和は固より前清の帝政と相容れずと雖、若し之を支那國民の歴史より抹殺するときは、人文繼紹の上に虧缺を生じ、支那國民の世界に冠たる所以のもの消滅すればなり。

第六節 文明繼紹の第二方便(文學)

茲に文學と稱するは言語文字を以て調和の美を現はすもの、即ち詩文なり。調和の美は實物に非ずして關係なり、此の關係は之を心に感ずべし、之を言語に表はすこと困難なり。古來數字を以て調和の關係を表はさんご試み

たる者あり、例へば易の繫辭上傳第九
章、希臘ピタゴラスの哲學周易の目的は陰陽二氣

結合の種々の程度及様式を以て人生事物の間に於ける調和不調和の理を説明せんごするに在るもの、如し、然れども數字又は記號を以て調和の美を表示するものは普通人に解し難く、唯だ専門家能く獨り之を解するのみ。茲に言語或は文字を以て調和の美を現はす方法にして普通人も猶ほ能く之を解するもの唯だ一あり、即ち調和ある事物を調和ある言語又は文字を以て具體的に言ひ現はし、其の言語を聞き又は其の文字を讀む者をして之に由り其の事物を想見する間に其の調和の美を感得せ

しむること、是れなり。即ち詩文は調和ある外形(即ち言語又は文字)を以て調和ある意味を言ひ現はすものなり。易の卦は解し難きが故に聖人之に象を繋げ、火水龍馬山澤等の如く陰性又は陽性を有する形物を藉り、文章を以て具體的に之を説明したり。

由是觀之、支那の「文」なる文字には元來二様の意味あり、其の一は人文、天文、文明など云へる場合の如く、直接に調和の關係を指す場合、是れなり、其の二は言語文字を以て此の關係ある事物を具體的に述ぶる場合、即ち所謂文學の文是れなり。此の點に於て余は支那の文と希臘の「ロゴ

ス」の間、自ら相契合する所あるに注目せざるを得ず。

希臘の「ロゴス」は元來言語の義にて又道理の義なり、即ち物の道理は無形なれば唯だ言語を以て之を表示すべきのみ、因て言語の字に又道理の義あり、即ち英語の「ロジック」論理^學「サイコロジ」心理^學「ソシオロジ」社會^學等の語源此に在

り。之と同様に、調和の關係は無形なり、唯だ詩文を假りて之を言ひ現はし得るのみなるが故に、文の字に調和と詩文との二義あるなり。

支那に於て文學は政治と相離れず、相與に文明繼紹の大方便を爲せり。其の故他無し、政治の要は社會の調和關

係を工夫して之を事實に現はすに在り、此の工夫に巧なる人を聖人と謂ひ、其の實行に巧なる人を賢者と謂ふこと上述の如し。乃ち政治を行ふ前に先づ心中に於て調和の工夫を立つる必要あり、而して此の工夫は無形のものなれば、必ず之を文章に述べて人に示し、以て或は其の賛成を求め、或は其の服従を制せざるべからず、而して善美なる社會調和の手段を述ぶることは善美なる文章を以てせざるべからず、文章拙なるときは其の政策も亦拙なるが如く思はるゝ故に、支那に於て政治に志す者は必ず大文章家たるを要し、政治界に文章の重ぜらるゝこと

世界無比なり。獨り佛蘭西の政治界に於て形勢稍之に近きものあるを見るのみ。然りと雖、文章の善美は一朝一夕に之を修し得べきに非ず、必ず過去の文明に關する典籍及古人の詩文を材料として以て詞藻を練らざるべからず、此の事實は共和の今日に於ても昔日と多く異なること無し、現に南北政争の如き、地方官と中央政府との討論の如き、電報を以て之を行ひ、互に其の文章に苦心すること、非常なり。支那の官廳には必ず文章を以て要路に立つ祕書あり、支那今日の政治公報即ち官報は宛然一種の活きたる文集なり、即ち文學が政治と相關連して文明繼

紹の一大方便たる所以のもの此に存す。

第七節 文明繼紹の第三方便(金石)

古物は各國民の之れ有る所なり、然りと雖、單に骨董品として之を愛玩するに、過去の文明を後世に傳ふる所以の方便として之を尊重するとの間に大差あり、支那國民の金石に於ける、古代の文明を百世に繼紹する方便の一として之を寶愛せり。金石とは鐘鼎尊彝碑碣の如く金製又は石造の器物にして、大抵は其の時代に關係ある文字を刻したるものを謂ふ。凡そ全国各地に金石の豊富なる、又其の善く古を語る、又一般國民が之を尊重する念の

深き支那の如きは世界無比なり。支那の各省各縣必ず多少の金石あり、一步戶外に出づれば則ち之に遭遇するを得べく、又土中井底より貴重なる金石を發掘すること殆ど虚歳無し。宋以來の學者之を著録して以て大部の書冊と爲すもの多し、歐陽修の集古錄、趙明誠の金石錄、李遇孫の金石學錄、劉喜海の金石苑、王述菴の金石萃編等其の著名なるものなり。又一地方の金石を集録するものに劉喜海の長安獲古編、楊守敬の湖北金石志の如きあり、或る一時代又は一種類の金石のみを集録するものあり、馬邦玉の漢碑錄、吳大澂の古玉圖考の如きあり、又金石の

收藏家が自家の收藏を圖録して同好に頒てるものあり、吳雲の二百蘭亭齋金石記、端方の匋齋吉金錄の如し。支那の金石如何に豊富なりとも今日の國民と没交渉なるときは價值少なし。夫の埃及の金字塔は金石の著名なるものなりと雖、今日の埃及人と無關係なり。支那の金石は則ち然らず、其の最も古きものに刻する所の文字より漸次轉化して今日の文字と成りたる次第は之を明確に尋窮するを得べく、其の記する所の事實も亦着々歴史に徴すべし、之に依りて歴史の誤を正し、或は其の缺を補ひたる事例も少しとせす。支那國民若し中途にして異

國民の征服を受け其の文華を混入したらんには、何ぞ能く此の如くならんや。

是に於て余は文字に由り繼紹する支那國民の文華が、言語に由り繼紹する他國民の文華に優る所以のものあることに著眼せざるを得ず。抑イロハ及abcは發音の記號のみ、文字に非ず、從て之を以て綴りたる所は言語の記號なり、文字に非ず、所謂文字は其の各一個に固有の意味あるものなり、即ち文字は意味の記號なり、言語の記號に非ず。言語は時代と共に轉化す、文字の意味も多少の變化を免れずと雖、之を言語の轉化に比すれば遙に輕微

なり。是を以て眼に由り文字を以て古代の文明を傳ふる國民は、耳に由り言語を以て之を傳ふる國民に比すれば、古代文明の繼紹の爲に遙に有利なる地位に在り、現今の世界に於て文字を以て古代の文明を傳ふる者は唯だ支那國民あるのみ。古代の羅馬人の言語は中途に於て甚だしく轉化したるに由り、特に拉甸語を習得したる者に非ざれば、之に因り古代羅馬の文華を知るところを得ず、其の不便知るべきなり。是を以て文字を以て古代の文明に關係したる事迹を刻したる支那の金石は、其の文明を累世繼紹する有力の方便たること明なり。

支那の金石中特に重きを置くべきは碑帖なり、碑とは墳墓廟祠に建つる所の碑石を謂ひ、帖とは古人の墨蹟を後世に傳ふる爲め上石したるものを謂ふ。碑の尊ぶべき所以のものは他なし、其の録する所の事實は、或は古人の傳記に關し、或は廟祠建築の由來に關し、多少綿密なるものなれば、採りて歴史の材料とすべきもの多く、且一時の能書家をして揮毫せしめたる者なるが故に、法書としても亦價值あるに因る。王羲之の蘭亭修禊序、王獻之の洛神賦の如きは帖の秀逸なるもの、歐陽詢の化度寺僧邕禪師舍利塔銘、虞世南の夫子廟堂碑の如きは碑の卓越なる

もの、俱に支那書道の典型なり。凡そ書道は支那國民が其の古代の文明を繼紹する所以のものたる金石の寶重と密接の關係あるを思へば頗る深遠なる旨趣あり、支那を知らんと欲する者は此の消息を知らずして可ならんや。

第八節 支那文明と日本文明との關係

以上數節に於ては支那國民が主として歴史、文學、金石の三者に由り、其の古代の文明を繼紹して今日に至れる次第を述べたり。此の事あるが爲めに支那國民は近世國民の一にして猶ほ且其の文明は舊式なるに至れり。此

の如き國民が歐米の近世諸國民の爲めに誤解せられ、其の文明の眞價を認められずして、唯だ世界の進運に後れたる老朽國民を以て目せらるゝこと亦怪むに足らず。此の爲め支那は其の對外關係上不利にして且危險の地位に在り。支那を此の地位より救はんを欲する者は、必ず先づ支那文明の眞價を理會せざるべからず、能く之を理會する者は唯だ日本あるのみ。此の事を明にせんが爲め茲に支那文明と日本文明との關係を講究せん。事實を言へば、支那文明は獨り支那國民の文明に非ずして又日本の文明なり、余は歴史の事實に依りて之を言ふ

のみ、斷じて支那を上げ日本を下すの意は非ず。日本の歴史は神武天皇紀元五百六十四年崇神天皇に至るまで天下無事、其の間に孝靈天皇の時、秦人徐福の童男女一千人を率ゐる三墳五典を齎して我國に來ることの傳説あるも確實ならず、唯だ秦の威力朝鮮に及び、始皇歿後秦亂るゝに至り、趙燕齊の亡民多く朝鮮に歸化したるは事實なり。即ち崇神天皇の時天下多事なりしは、支那民族の壓迫を受けたる朝鮮半島の民族が我が西邊を侵したるに因るなり。神武天皇紀元六百二十年以後大陸民族の朝鮮半島を経て日本の九州地方を侵す者漸く多く、仲哀天皇之

を征して利あらず、遂に役に崩ず。是に於て神功皇后朝鮮半島に遠征し三韓を征服す。此の時より支那國民の文物は三韓を経て日本に傳はりたり。現に日本和歌山縣の伊都郡隅田村の神社隅田八幡に神鏡を藏す、背面に篆隸兩體混合の文字あり、是れ韓鏡なるか或は日本に於て鑄造したるものなるかに付ては學者の説一定せず、然れども伊都八幡は神功皇后が三韓往復の歸途駐輦したまひし所なり、因て三韓に傳はりたる支那文明に關係あることは疑を容れず。神功皇后の所出應神天皇の時、三韓の中、任那、百濟の二國年々入貢し、其の歸化人我に種々

の技術を傳へたり。百濟の博士王仁、冶工織工醸工等を率ゐて歸化し、論語及千字文を獻ず、日本始めて文教あり、次の天皇仁徳が都を難波即ち今に大阪に移したるは、其の良港にして海外交通に便なりしに因る。此の時までは皇居も藁屋なりしが、此の時より其の建築漸く華美に向ひ、屋上瓦を用ひ、又石垣を繞らし、石段を以て上下したり、蓋し外國使節に對し威儀を飾る必要ありたるなり。是れより一百五十年を経て雄略天皇の時支那の劉宋孝武帝の大明元年より齊の高帝の建元二年に至るは、是れ日本最初の文華時代なり。當時或る一科の工藝に通ずる部下を率ゐて歸化する者は歓迎せられ、地方

に於て土地を給せられ、其の工藝の産出する所を以て朝廷に事へたり。日本紀元千二百十二年欽明天皇の二年に百濟より佛法を傳へ、之と俱に支那南北朝時代の文華盛に日本に傳はりたり。推古天皇以後直接に隋の朝廷と交通し、我が朝廷の禮儀も備はり、學生を支那に留學せしめたり。

隋亡び唐起り、太宗文教を以て政治の基礎と爲すに及び内外學生の長安の大學に遊ぶ者八千人、曩に遣隋使に隨ひ長安に到りし日本の學生高向玄理、僧旻も唐の貞觀十四年まで長安に留まり、歸朝して國の博士に任じ、大化改

新の政治に參與したり。此の時まで我が日本は族制政治を行ひ、大族の宗家の家長其の族人を率ゐて朝廷に事へ大官に任ぜられしが、此の時より之を廢し、唐制に倣ひ選叙考課の制に依り官吏を任免黜陟したり。是れより孔夫子の大成したる社會調和の理想は又日本文明の基礎と爲れり。唐高祖の永徽四年我が孝徳天皇白雉四年日本の使始めて唐朝に到る、此れより唐末の亂に際し、我が寛平四年菅公の奏議に依り遣唐使を廢したるまで二百五十年間往來絶えず、又僧侶の遣唐使に隨ひ入唐し、歸朝して伽藍を起し、宗門を開く者甚だ多し。例へば僧空海諡號弘法大師の如き

は、學に通じ書を善くし、高野山を開きて有力なる支那文明の傳達者と成りたり。遣唐使及留學僧に由り盛に輸入せられたる唐朝の文明は燦爛たる我が奈良朝の文華と爲り唐の永徽令に倣ひて定めたる我が太寶令は、政權武門に移るまで五百五十年間日本全國に行はれ、政權武門に移りて後も、明治維新に至るまでは京都公家天皇に直屬して徳川幕府の節制を受けざりし摺紳の上に行はれたり。京都を中心としたる我が平安朝の文明は太寶令の文明なれば、即ち源を唐朝に發するものなり。源頼朝武士の總長として政權を握り、幕府を鎌倉に起し、濃厚華奢なる京都の文明に對する

反動に因り、清淡質素なる鎌倉文明を喚起したり。而して鎌倉文明も亦是れ日本自發のものに非ず、是れ此の當時盛に我國に渡來したる禪僧が輸入したる所の宋元時代の支那南方の文華なり。元寇以後日本に於ける支那文明の威力は暫く衰へしが、足利氏鎌倉の幕府を倒し、自ら幕府を京都の室町に開くに至り、清素なりし鎌倉式文華は一轉して沈鬱にして驕奢なる室町式の文明と成り、多く明朝の文物を輸入したり。足利氏は財政上の必要に因り頻りに明朝と往來し、將軍義滿自ら明服して明使を迎ふるに至る。現今に至るも唐宋書畫の日本に多き

は、室町時代に明商之を輸入したるなり。室町幕府衰亡の後、日本は群雄割據の世態と爲り、戦亂止む時無し。織田氏、豊臣氏、天皇を佐けて一時統一の治を爲すことを得たるも、共に文學の素養なく、文教を以て政治の基礎と爲すことを知らざりしに因り、權力永續せず、其の人死すると俱に其の統制も亦破れたり。徳川氏此に鑑みる所あり、家康僧侶の文學ある者を顧問とし、京都搢紳の家に保存せられたる舊記に徴し、之に依り天皇、公家即ち京都搢紳武家即ち群雄の及即ち神官寺社及僧侶より成る當時の社會を調和するの工夫を立て、法度を以て之を厲行し、霸業一旦成るの後は盛

に文武兩道主義を唱へ、武人をして文學を修めしめ、諸侯に命じて學校を起し、儒者を用ひしめ、茲に江戸幕府二百五十年の基礎を立てたり。徳川幕府は海内の統治を堅くする必要に因り鎖國主義を取り、一般の海外交通を禁じたるを以て、日本人士の支那に往來する者多からざりしと雖、九州の一隅長崎港に地を畫して支那商人在住の處と爲し、貿易を許したり、又文學の志特に篤き水戸侯の如きは、特に支那の學者明朝の遺民を聘して文學を教へしめたり。是を以て徳川氏の開きたる江戸の文華は多く知名の文學者を出したり。

以上歴史上の事實を追ひて述ぶる所に依り、日本國民の支那文明に對する關係は決して外國の文明に對する關係に非ず、之を歐洲現在の國民の希臘羅馬の文明に對する關係に比すれば遙に密接なるものあり、殆ど北米合衆國文明の英國文明に對する關係に髣髴するものあること明なるべし。孔夫子は支那國民の先師にして我亦之を先師と仰ぎ、仁義禮智忠信孝悌は支那の道德觀念にして我亦之を我が道とし、其の文字の如き亦其のまゝ之を日本語として用ひ、李杜韓柳は支那の詩文家にして我亦之を尊崇すること自國の詩文家よりも厚し。即ち日本

人の支那文明の産物に對する殆ど彼我の別なく、恰も之を以て支那國民と共通のものご爲すが如し。

第九節 支那文明と日本文明との差違

日本と支那と其の國土を異にし、其の歴史同じからざるが故に、兩國の文明亦相違あるは自然の勢なり。此の相違は兩國國民が其の國民として存立の出發點を異にするに始まること、余が曾て社會學上より唱道したる所なり。日本は島國なり、而して初め海外より此に移住したる民族皆同一種に屬したり。此の民族の原住地は其の所在不明なり、歴史に之を稱して高天原と謂ふ、故に此の

民族に高天原民族の稱あり。高天原民族の最も早く日本に入りたる一部族は本島の北海岸に繁殖し、次に入りたる一部族は大和に占據したり、然れども血統の關係に於ては共に末流に屬し、最後に来りて九州の一隅向日に在りし一部族こそ其の本流に屬し、其の族長は血統の關係に於て既に他の二部族の服従を制する權利ありたり。神武天皇此の中心部族の族長として之を統率し、東征するに及び、北海岸の部族は戦はずして其の國を譲り、大和に在りし一部族は戦ひ敗れて後之に歸順したり。乃ち神武天皇大和の橿原に都して天下に號令す。此の如く

争ふべからざる血統上の嫡庶本支の關係は、初めより我が國民の團結の基礎を爲し、國民皆姓を同うし、同種相婚し、妻を異姓に求むるの習慣は成立する餘地無かりき。支那は大陸の國なれば、大に事情を異にし、漢民族の各部族水流に沿ひ中原に入るに及び、各部姓を異にし、同姓相婚を忌み、必ず妻を異姓に求めたり。各姓皆對等にして、其の間に本支の別あることなく、甲姓の宗家の嫡長に於て乙以下の諸姓に屬する者を統御する權利あらざりき。之を約言せば、血統の關係は異姓を團結して國民を爲すに足らざりき。故に國民と云ふ如き大團結の主長たる

者は、血統の關係以外に異姓を統括する所以の資格あるを要し、第一に武力を必要としたることは明かなれど、武力は人の一生中に盛衰の變あるを以て、之のみに因る團結は永續せず、之に加ふるに異姓の民をして敬服せしむる所以の文徳を要したり。文徳に種々あり、支那上古の帝王は、或は民に醫藥を教へ、或は農業を教へ、或は火食を教へ、結婚を教へ、建築を教へたりと云ふ、皆是れ文徳なり。就中堯帝と舜帝とは社會調和の工夫に長じ、幾多の姓族に其の勢力の大小に應ずる適當の地位を與へ、之をして満足せしめたり、是れ豈堯典に所謂「平章百姓」の本來の意

味に非ざるを得んや。即ち支那に於て社會調和の理想の早く發達したる所以のもの、異姓を統括するの必要に在りしや明かなり。

日本に於て君主の君主たる所以は其の全國民の宗家の嫡長たるに在るが故に、血統の混亂を防ぎ、嫡長の系統を維持することより重大なること無し、萬世一系皇統連綿の重要な所以のもの此に存す。支那は則ち然らず、人君社會の調和を工夫して其の徳を以て之を實行し、果して成功するときは天下文明し、燦然たる人文の發展を見るを得べし。然れども文華の隆盛久しきに涉りて繼續

するときには虚禮虚儀に流れ、君民共に智力衰退し劣情發動して、世亂れ俗頹る、是に於てか改絃更張して人心を新にする必要を生ず。罕には中興の君出で、挽回の功を奏することなきに非ずと雖、其の多くは統代を變へて根柢より調和の工夫を改むるに非ざれば到底治平に復し難きを常とす。支那の歴史に統代の變、即ち革命の多きは職として此に起因す。上述の理由を以て推すときは、日本の文華と支那の文華との間に相違の點あることも亦自ら明かなり。日本の社會調和は人爲的に工夫したるものに非ずして、一家族より繁殖して大家族(氏族)と爲

り大民族と爲る自然の順序に基づくものなり。故に儀禮を以て之を飾るの必要なく、其の團結は質樸にして堅實なり。支那の民衆團結は血統の自然に基くに非ずして、調和の理想に基づくが故に、理想を解せざる者を率ふる爲めには儀禮を以て之を文飾する必要あり、日本國民の質實を愛するに反し、支那國民の文飾を重ずる所以のもの此に在り。支那の建築物は翬飛丹刻燦然として眼を眩す、日本の家屋は質素なる白木造なり。

斯の如く日本と支那と國民團結の徑路を異にするが故に、其の文明の傾向を異にするところは、互に相理解し、社會

調和の大道に於て相一致することを妨げず。且夫れ文飾を尊ぶ支那の文明も亦其の長所あり、余自ら支那國民の里閉に起居して其の日常行ふ所を見るに、臨機應變調和の存せざる所にも調和を工夫し以て人に好感を起さしむることは、到底日本人の及ぶ所に非ざることを看取せり、此の點に於ては日本人は餘りに窮屈に、餘りに正直なり。先年余の目撃したる一例を以て之を言はんに、二百六十七年間清朝歴代の皇帝が即位の禮を行ふ式場たりし大和殿を以て共和政體第一大總統の就任式に使用する如きは、我等日本人の殆ど想像だにも及ばざる所なり。

日本人の考よりすれば、國會に於て行ふを至當となさん支那人は大和殿の額面を蔽ふに禮殿の二字を縫箔したる緞綯を以てし、舊寶座の如きは之を他に移さず、大總統其の前に立ちて共和憲法に忠誠を誓ひ、教書を朗讀す、文武百官、國會議員、各藩の代表、前面に立ちて大總統と三鞠の禮を交換したり、是に於て共和の意味は十分に貫徹し、復た何等の不合式無かりき。又結構新設に銳意にして修理保存に冷淡なるも支那國民の日本人と異なる所なり。日本人は萬世一系の皇統を保存するの餘、何事の保存にも熱心なれば、支那内地各處に善美を盡したる宮殿樓閣の傾頽に委せられつゝ、あ

るを見て、惜み且つ怪まざる無し。然れども修理は難く、新設は易し、故に調和の工夫に熟達せる支那國民は、寧ろ新設の易きを取りて修理の難きを取らざるなり。

第十節 結論

以上數節に分別概論する所に由り之を觀れば、支那國民の存立の基礎たる文の連綿繼紹、並に此の繼紹の方便たる歴史、文學、金石に對する同國民の尊崇心は未だ曾て衰へざるが故に、支那國民の存立は尙ほ確實なる基礎に依るものとして之を觀るべく、近年政治上に於て起りつゝある變亂の如きは唯だ表面上の現象に過ぎず、深く國民

存立の根柢を動かすものに非ざるなり。

日本の文明と支那の文明とは其の源流を一にするが故に、互に相理會することを得べし、之に反し西洋の各國民は、到底近き將來に於て文の理想の價値及皇統連綿の價値を理會し得べきに非ず、因て日支兩國民は永く相依り相助けて其の文明を護持し西洋各國の方面より來る危険に備へざるべからず。

現に西洋各國民の中より起り、日本及支那文明の基礎を破らんとする共同の危険あり、何ぞや、曰、西洋各國文明の基礎たる平等主義是れなり。西洋の國民は分析を知り

保合を知らず、人間社會を分析するときには唯だ個人あるのみ、個人は皆平等なり、故に各個人をして各其の人格を十分發展せしむる爲め、總へて人爲的の束縛を除き、人々の競争を自由にするは、西洋各國民の現に進みつゝある大道にして、又其の富強を致せる所以なり。獨り富強のみ人生の目的なりとせば、西洋の文明獨り正道に當り、日本及支那の文明は邪徑に陥りたるものと謂はざるを得ず。然りと雖、日支兩國民の思想よりすれば、人生富強の外尙ほ更に尊ぶべきものあり、即ち人類天與の靈智を以て大和保合の工夫を練り、人生をして調和の美を盡さし

め、以て天地自然に通ずる大道を進むこと是れなり。是の目的の爲めには、西洋各國の富強を以て其の平等主義を擴張せしむるは、日本及支那の爲に危険ならざるに非ず、即ち支那は之に因り文の理想を破られ、日本は之に因り皇統連綿の價值を減ずる虞あり、是れ日支共同の危険なり、唇齒輔車、相共に之を未雨の前に綢繆せざるべけんや。

然りと雖、亦文の理想を更に敷衍して考ふるときは、平等主義必ずしも排斥すべきに非ず、是れ自ら深き旨趣ある人生の一大要義たるのみならず、地球の表面は廣きが如

くにして實は甚だ狭く、其の大部分は平等主義に因り富強を致せる強國の占むる所なり、故に之と相容れず、之を排斥するに非ざれば存立すること能はざる文の理想、及皇統連綿の事實は褊狹の譏を免れず、能く之と相容れ之と兩立することを得るものにして始めて完全なる文の理想及皇統連綿の事實と謂ふべきなり。

立憲政體は西洋各國の政體にして平等の大義に基づくものなり、而して日本は既に之を採用し、之をして皇統連綿と兩立せしむる途に於て進みつゝあり。支那の共和政體も亦平等の大義に基づくものたる固より言を待た

ず、現今の支那は文の理想と平等の理想と對立し、其の衝突に因り種々の波瀾を起しつゝあるの時なり、此の如き形勢は或は尙ほ數年間繼續せん、然りと雖余は四千年の久しきに亘り繼紹したる文の理想の根柢が容易に動くべきを信ぜず、余は四千年の薰陶を経たる支那國民の文の天才に信賴すること深し、其の必ず數年の後に於て個人平等の大義に戻らず、社會調和の理想に合ひたる共和政體を工夫し、一方面に於て日本と相容れ、他方面に於て西洋各國と兩立する文明の天地を此の地球上に開かんとことを信じて疑はざるなり。

後藤文學士批評

近時金石學の研究は龜版文の發見によりて長足の進歩をなせり。龜版文とは河南省彰德府湯陰縣安陽河畔小屯、殷墟より出土せる龜卜用龜甲獸骨に見はれたる象形文字を指す。蓋し金石は周代以後のもの多く、周以前のものなきに非ざれども、多くは鐘鼎彝器に散見せる簡古の文字のみ、殊にその文章をなすもの少なし。龜版文にありては然らず、字形の一層繪畫に近き外、尙その文章に於て各種の文化を語れるもの頗る多く、時には數十字、百餘字より成れるものあるを見る。吳大澂、端方、劉心源等の金石研究は、今後の龜版文の攷覈によりて更に光明を得べく、同時に殷代の文明をその當時の象形によりて讀むことを得べし。現代文化の龜版文によりて説明し得る事例亦少なしとせず。之

を思ひ字源を窮め文化の沿革を辿る、これ吾人の一大快事となす所なり。龜版研究の新興を卜し、金石學との關係を看、こゝに一言蛇足を加ふるのみ。

李杜韓柳の尊崇せらるゝは、獨り本邦詩人墨客の間のみならず、苟も文字あるもの皆仰望せざるはし。思ふに本來思想學術界には國境なるものなし。支那歷朝の文豪詩聖にして日本文學の上に直接間接光彩を放てるもの枚擧に遑あらず。或は云はん、日本文學史の大半は支那文學の輸入に據りて成れりと。

學者、漢民族が威儀形式を偏重せる歴史的事實を以て、由來支那國民性の一に數へたり。今調和の理想に基つく必要より論じ來たりて漢族が文飾を重んずる所以を説き得て餘す所なし。北方異人種に對する包容同化は必ずしも爲政者の政策を俟たずして實現せらるゝに似た

り。漢族調和の力亦偉大なりと云ふべし。

樓閣の破壊につきての觀察洵に道理あること哉。邦人にして支那内地に遊ぶもの、常に殿堂敗頽の光景を見て之を惜むの情切なり。余支那に遊ぶ二回、毎に支那當局の何故に古社寺保存會に倣ひ適當の制を設けざるやを疑ひ居たり。今支那國民は寧ろ新設を易しと爲す理を覺るに及び、疑團釋然解けたるの感あり。

全篇讀了、熟考ふるに、支那人文の理調和の美を根本的に研究せんには、文明關係の淺からざる日支兩國學者の共同事業と爲さるべからず。由來日本の支那研究は現代を没却するの傾ありたり。眞に支那を理會しその人文の美を味はんと欲せば、日支兩國の學者相互によく理解し、然る後その研究に入る可きのみ。かくの如くすれば是れ眞に支那正觀の法を得るに庶幾からんか。

支那正觀

丁巳八月二十九日

於東京小石川小日向臺町

辱知朝太郎拜誦妄批死罪

八四

支那正觀終

漢譯支那正觀

新編文派五集

漢譯 支那正觀

法學博士 有賀長雄 著

第一節 序言

個人間之友交。必互相體其性質。而後可言親善。國民間之交際。亦必互相體其精神。而後可言親善。若夫由經濟上之利益。或軍事上利益。而所連結者。祇表面暫合之親善耳。非由兩國民之心魂而生之永久親善也。所謂國民之精神者。居住於一定國土內之民族。能團結為一個國民之中心之事實。是也。今

序言

夫日本民族所以能團結爲日本國民中心之事實。則在奉戴一姓連綿之皇室。支那民族所以能團結爲支那國民中心之事實。則在繼紹四千年來同一之文明。詳言之。即日本之價值。在其民族奉戴開國以來同一之皇室。而於其下聚爲國民。支那之價值。在其民族能繼紹保存其世界最古之文明。藉以團結而立國於不敝。吾故曰。日本國民之精神。在於世界無比之皇統連綿。支那國民之精神。在於世界無比之文明繼紹也。今中日兩國民必先互相體此偉大事實之由來及其結果。互相體其他一方之精神。而後兩國之親善。可得而言。

第二節 世界無比之文明繼紹

世界史上所載古代之文明甚多。例如印度文明。埃及文明。亞敘利文明。巴比崙文明。猶太文明。費尼克亞文明。波斯文明。希臘文明。羅馬文明等皆是也。雖然此等文明。經數百千年後。各隨其國民之衰亡而同歸於盡。至今日僅成芻狗。聊供考古學上之研究材料而已。惟支那之文明則不然。其國民的存立。由四千年前直至今日。連續不斷。而其所傳來之文明仍係古代之隆盛者。雖文明因時代之推移。中有汗隆。然其本質。則古今同一。故今日支那國民對於支那文明之關係。較之希臘國民對於希臘文明之關係。實迥不相同。蓋希臘國民。自其文明之隆盛時代。而至今日。其間或歸羅馬東方帝國之管轄。或受阿

託曼帝國之統治。又有時爲斯拉扶民族所侵襲。其人種言語風俗。人文等皆不免受大變化。故今日所謂希臘國民者。不過徒住於古代希臘人所住居之土地而已。至其對於古代之希臘文明。則殆全不相關。埃及亦然。今日之埃及人。若就地理上言之。雖仍爲埃及人。其實均非古代埃及人之眞子孫。而埃及人之眞子孫。僅可於奶兒河左岸之苦夫託村見之。蓋一般之埃及人。因爲波斯人。希臘人。回教民族。及土耳其帝國等先後所蹂躪。均混入異種民族之血。僅可於頭蓋骨之形狀認爲古代埃及人之痕跡而已。今日之支那國民則異是。蓋依然。古代支那國民之子孫也。四千年間雖未嘗無他族之擾亂。然其國

民常能以其文明之力持諸無形而不蒙其害。換言之。即凡有以武力制服支那國民者。必反爲支那之文明力所同化。大抵二三世之後。胥混合於支那民族中。而泯其迹象。若匈奴。若突厥。若蒙古。遼金若滿洲人等皆明證也。余嘗甚怪之。支那國民。其在世界也。有若是之特徵。而東西學者之眼光。何以獨未見及。余今特稱此偉大之事實。曰古代文明無比之繼紹。願使與日本國民所特有之皇統連綿卓然並峙也。爰請嘗試於下各節。窮究其原因及其結果而論述之。

第三節 西洋文明與支那文明之對比

西洋各國所以有今日雄大之文明者。其肇端實在科學。當科

學未發達以前。歐洲中古之文明。殆較支那古代之文明爲絀。迨至十五世紀以後。西洋各國。以科學之發明。成爲無限之進步。壓倒東洋之文明國民。例如發明火藥。盡破古代之戰術。世態爲之一變。又如發明蒸氣機關與電氣之應用。短縮地球上之距離。世界之面目爲之一新。蓋自化學及物理學上有種種之發明。而東西國民之生活狀態。勢不能不起一大革新矣。科學之範圍雖甚廣。然所用之研究方法唯一。即分析及概括是也。蓋分析與概括既相待而行。則二而實一也。所謂分析者。分解一種之物體。知其成立之要素。或分解一定之現象。知其原因結果之關係之謂也。所謂概括者。對照分析上所得之事

實。擇其相一致而棄其相異者。以爲自然界之理法之謂也。化學家分析各種之物體。而歸之於原素。概括各種原素與他種原素相結合所生之結果。以爲化學上之理法。物理學家分析物體之變化。歸之於一定之原力。概括一種原力例如熱所及于物體上之變化。或甲種原力例如電氣變爲乙種原力例如運動之關係。以爲物理學上之理法。經濟學家分析貿易市場之現象。發見物價漲落之原因。以爲支配物價之理法。生理學家解剖生物之肉體。知其臟機之組織及其官能。概括各種藥石所及之效果。以爲醫學之法則。然則物質界分析概括之爲用。可謂大矣。支那古代所行者。亦未嘗無依此法者。例如神農氏所謂。始味草

木之滋。察其寒溫平熱之性。辨其君臣佐使之義。神而化之。遂作方書以療民疾。頗與今日之藥劑學相類似。又如史記扁鵲傳所載。黃帝之時。名醫俞跗。診病施術。有與今日之解剖學合致者。有謂火藥係支那人先發明。其說亦近。至於道家煉丹之術。其中與今日之化學相符合者亦多。

雖然支那文明所根據者。非在於分析概括。而別有在。即保合是也。科學之威力。既壓倒全世界。各國賴之而致富強。則生息於今日者。自不免過信分析法。以爲分析法有莫大之效能。凡百事物。皆可由分析法探其精奧。視於非科學的之支那文明。大有輕侮之傾向。雖然其實人類文明之基礎。非徒分析所能

爲功。而保合之作用。亦爲其中之一大要因。不可不知也。夫保合云者。即結合數個之異物。因其間之調和關係。使生新事物之謂也。若保合能得其宜。則所生之新產物。必能使人興起美感。此即所謂保合之美者是也。保合美之最易解者。莫如音樂。今若合奏善調合之甲乙二音。則別生一丙音。其爲音之美也。既非甲音又非乙音。故俗語多以保合之美譬之音樂。謂之調和之美。其實調和乃本音學語也。今若將丙音分析之。則惟有甲乙二音。而調和之美何在。可知分析之於調和爲無用也。繪畫亦然。試將一幅畫圖分析之。則惟有描法。設色。及濃淡而已。然一旦以美術家之天才而保合之。則或成山水。或爲花鳥。而

呈各種之美觀。此非真有山水花鳥也。文學上之產物亦然。分析詩文。只有文字與章句。然一經文人巧爲排比。則詩爲李杜。文似韓柳。可以入人心而維世道。至于建築物。尤純然保合之產物也。所謂殿堂屋宇者。非初有殿堂家屋者也。至其實物。唯有木材。瓦石。壁土及釘鏈而已。而殿堂屋宇。不過因善爲保合。此等建築材料而所生之調和之關係者也。凡人類所製作者。大至于一國政治之機關。小至于衣服器具之末物。無一非由保合而成。而特可驚嘆者。即時代之產物也。同一時勢能永久繼續。則社會之事物。自相調和而生出該時代之特別事物。其趣味其風格。必與他時代不同。苟一見之。即知其爲何時代之

產物。但此時代之產物。未必皆限於泰平之時。即亂時亦有亂世之產物。例如宋徽宗時代及我國室町時代。決非太平之世。然仍有優秀之產物出焉。蓋在於四圍之事情。使社會之事物能調和與否而已。倘有一大有力者在上。能於其權威之下。調和事務。則其時代之產物。亦必特別優秀。歷史上此例甚多。如清朝全盛時之乾隆時代之產物。及我德川氏全盛時之元祿時代之產物是也。

更放開眼界論之。自然之物體皆自然界之調和產物也。即風雨寒暑地味之調和。可使禽獸草木繁殖。一男一女陰陽之調和。可使子孫蕃衍。而風雨寒暑地味之所以調和。考其原因。又

爲日月星辰運行之調和產物也。可知保和之美。乃人類社會與天地自然間相貫通之大道也。

支那因保合之美。而成古代之文明。猶之西洋因分析之精。而致近世之文明。且文明二字。以形容保合產物之支那文明。較之以形容分析產物之西洋文明。尤爲適當。蓋西洋語之西異利撒生(文明)。其語源由臘丁語之西異利斯而來。西異利斯者。猶曰京樣也。即謂化鄙野之風爲都會之風是也。而支那之文明二字。則由易之文言「天下文明」而來。即謂人間社會之事物。至於極調和之意也。故文之一字。足以支配古來支那國民之精神。而今日之科學。即「賽焉斯」一字。亦足以支配西洋各國民

之思想。

詩曰「允文允武」。書曰「文思安安」。易曰「觀乎人文以化成天下」。論語曰「天之未喪斯文」。又曰「行有餘力則以學文」。其所謂文者。斷非指文詞之文而言。視之文詞之文。實含有深淵與遠大之旨趣。可以知也。

文武並言。則其文當指人世調和之工夫。武當指護持此調和者之實力。以支那之理想。則凡善治天下者。必須具此兩德。文思安安者。蓋言於調和社會之事業。得以平易爲之。而無苦心之跡也歟。

第四節 支那國民文的理想之沿革

支那國民。從古至今均以文爲理想。蓋生活於此理想中愉快之國民也。文的理想到於極處。即保合太和之謂也。茲試簡易說明之。人類雖與他生物同爲天地間調和之產物。然與他生物實有不同之點。即人類具有靈智。自有研究調和之能力。故人類聚合所組織之社會。亦必能調和。且此調和與生成動植物之寒暑風雨地味之調和。以及致此調和之日月星辰即大宇宙之調和。復相容相通。而不相悖。如此使與天地相通之調和。實現於人間社會之內。各人爲其一分子。此即支那國民道德之本義也。苟有調和社會之天才。且能以身率衆。使組織一適合此調和社會之有德有智之人。則稱之爲聖人君子。聖人

稱其德。君子稱其智。蓋同爲支那國民之理想的偉人。而有保合太和之能力者也。就往時聖人君子之事蹟。察其保合太和工夫之所存。著爲言語以教世人。是爲儒者之本分。儒者宗主之孔子。究心唐虞三代之事蹟。將其詔勅制度編爲尙書。擇男女詩歌中之敦厚者。選爲詩經。若夫變風百三十五篇。則雖怨刺而止于禮義。亦所以懲慝社會之調和也。以同一之社會調和。永久束縛人心。則靈智漸衰。反足以致亂。故古聖人一面苦心調和。一面復考究變通之工夫。在支那上古時代。有以圖形解釋調和及變通之一書。或曰係支那以前之文明國民所傳。其理深奧。頗難索解。周文王及周公。覃志精釋。仍未太明。孔子

好古敏求作十種之註解。即易經是也。孔子以社會之調和與不調和之所由分。與各人之行爲大有關係。遂因魯史官所記。筆削修正。對於當時諸侯之有益於調和行爲者。則褒之。有害者則貶之。褒貶之加。比於褒貶。即春秋是也。孔子既治以上四書。分授弟子。社會調和之理想。始有完形。以傳後世。後人遂稱孔子之業爲集大成云。雖然今日支那國民腦中所收藏之調和理想。決非昔時孔子及其學派所製作者。蓋理想既隨時代而發展。而歷代聖主賢人復變通損益之。遂有今日也。

周末諸侯中無一能採用孔子之理想而施諸政治者。秦始皇因專恃武威。人心散失。故其帝業至二世而亡。足爲後世人君

莫大之殷鑑。漢高祖知用叔孫通。陸賈之策。先由朝儀。示廷臣以社會調和之美。其效果至爲顯著。至於武帝。大興儒教。設大學於京師。以考究調和社會之理。當時政府採用之政策。如何綿密。由三禮之編纂可知之。蓋世間雖傳周禮儀禮作自周公。其實與夫輯錄周末及秦漢諸儒禮說之禮記。均是漢代之產物也。漢之統一。中道稍衰。間復中興。傳至四百年而盡。雖然社會調和之理想。不隨之俱亡。三國之時。變亂特甚。而世人追慕調和之念轉熾。因實行調和之困難。乃以文詞宣洩其鬱積。譬如睹迅雷疾風之摧岩折木。不禁切想自然之調和也。故遭亂未遠。而西晉風流才人輩出。爲郭璞之詩藻。陶淵明之歸去來

辭。王羲之之蘭亭修禊序。皆當時之產物也。而尤以王羲之之蘭亭序爲長。夫蘭亭序所以最聞名于後世者無他。蓋其人品。其境遇。其文章。其書法。皆能超越於當時不調和社會之外。而顯其調和之美也。即由孔子所製造之支那國民的理想。爲三國以後之變亂所醞釀。至成爲高尚優雅之支那文學。殆屬於此時代也。

李唐二百八十九年之統一。由于神堯父子。承南北朝分裂之後。以調和之理想。而恢復團結之結果也。唐興七年。天下大定。令州縣鄉設學校。天子親詣國學。釋奠先聖先師。世民尙爲秦王時。即延攬文學之士。以杜如晦。房玄齡。虞世南。陸德明。孔穎

達等十八人。爲文學館學士。分爲三班。令更日宿直。世民暇日。輒至館中討論文籍。藉以研究調和之理。世民即位後。置弘文館。收四部書二十四萬卷。集天下文學之士。於聽朝之暇。輒引之內殿。講論言行。商榷政治。當是時也。政治與文學。尙未分途。每藉文籍而窺古人前言往行。研究其有益於社會調和與否。直施之于政治。貞觀政要一篇。不外敘述其研究之結果。貞觀十四年。太宗親幸國子監釋奠。徵集天下名儒。以爲學官。學生通一經者。皆得補官。四方學士雲集京師。此即儒教之黃金時代也。

玄宗以後。唐運寢衰。後遂分裂爲五代及十國。至宋太宗。孔教

復興。佐命之臣趙普者。誦習論語。施於政治。謂以半部佐太祖定天下。以半部佐太宗致太平。歷史上之美譚也。太宗舉德行孝悌。親策制科。嚴覆試之法。御殿親試進士。至太宗。建崇文院。封孔子四十四世孫孔宜爲文宣公。真宗詔國中。於州城建孔子廟。幸于曲阜。謁于孔廟。改孔子謚法爲元聖文宣王。儒學至宋。時入干禪。而深窺理窟。思通鬼神。實能于漢學之外。自成宗派。證以近代哲理。往往闡合。淵源不沫。良有由也。

元祚最短。而支那國民之有非常同化力。即可于此時代證之。夫强悍絕倫之蒙古人。就武力而言。雖戰勝支那國民。而精神上實反爲支那國民所敗。蓋其固有之語言。風俗。習慣。多埋沒

於支那民族中也。

朱明旣興。漢民族以社會調和之理想。復得統一國民。上以經義範圍士人。科舉之制最盛行于此時。雖學者不道。而儒教之足以統一人心。即此可以略見。彼未解儒教爲何物之西洋人。謂科舉之制。足以阻害支那之進步者。只知其害。未知其利也。蓋科舉之真目的。非以試驗應試者果能通經書之義理與否。及善爲詩文與否。乃試驗其能十分感悟社會調和之美與否也。欲爲官吏者。果能理會經書之真意。感悟社會調和之美。必能奮發有爲。對於社會調和。思有所貢獻。不至自蹈于卑劣俗惡之行爲矣。此非科舉取士之利乎。至于近世。如曾國藩。李鴻

章。張之洞等之大人物，亦多出自科舉，得以防止支那之衰亡者。科舉之賜也。能感悟社會調和之美者。舉自布衣。應其才德授官。有非常之才德者。任以中央之大官。使管理國政。此世界無比之美制也。支那國民。于最近五百年來。即東洋航路發見以來。屢受西洋國民之壓迫。猶能保持其國民的團結。與之對抗者。科舉之制亦與有力也。

以上所述。由周以後直至今日。支那國民所以能保持其固有之國民的團結性。與其古來之文明。數千年來聯續不斷者。全因于社會調和之理想有偉大保合力與同化力也。由是觀之。文明繼紹之在支那國民間成爲絕大之事實。亦不讓於在日

本國民間奉戴一姓皇統連綿之爲絕大事實矣。欲知支那者。豈可蔑視此大事實耶。

第五節 文明繼紹之第一方便(歷史)

支那國民。果以如何方法。得繼紹其最古之文明乎。其主要之原因有三。本節先述歷史之特殊意味及其效用。

支那國民之對於歷史的觀念。與日本及西洋各國民之對於歷史的觀念。全不相同。蓋日本及西洋各國之觀念。均以歷史爲國民生活上之實錄。而支那之歷史目的。則在以各時代之事實。爲該時代人文之一分子而記錄之也。又日本及西洋歷史家之本領。在于紀實。而支那歷史家之本領。則在描寫該時

代之國民所建設之社會調和與不調和之情勢。據支那人之理想。各時代之君主。人臣。學者。技術家。逸民。殖財家等。皆相聚而構成該時代之人文者。記述其構成之次第。即歷史也。詳言之。凡國民之生活境遇。各因其時代而異。用其天才發動于此境遇之上。以造出該時代之人文。記述此造出人文之顛末。即歷史也。支那歷史的理想之在乎此。觀太史公之史記編纂法。及兩漢書以下各代之歷史編纂法。可以知之。

與支那國民之歷史的理想。有密接之關係者。年號是也。立年號而時變更之。支那古來之典例也。君主更替則改元。運值革命則改元。國有祥瑞或有凶事亦改元。以余觀之。年號之用。在

于人文推移上劃一段落。蓋社會調和之美之不能一律聯續。猶之文章戲曲之不能永久連續然。社會之調和。既經一定之年數。漸趨衰運。在所不免。宜變其局面。新其人心。使進于新調和。是即改元之目的也。

茲關於支那國民之歷史觀念。有可注意之一點。即歷史對於國民品性上所及之威力是也。支那之國體。無有比社會調和之理想重大者。而此調和。當待該時代人物之貢獻。故支那國民中之知廉恥者。皆以留芳百世爲莫大之榮。而以遺臭萬年爲莫大之辱。以事業與學問。對於該時代之人文多所貢獻者。則錫以文忠。文獻。文襄。文節。文敏。文勤公等之謚號。蓋文之一

字。在支那人視爲歷史中無上之美號也。此事與支那政治家品性上。有莫大之影響。余所觀見者。當民國四年帝制運動初起時。知名之士。因此而迷于進退者不少。其故無他。恐一旦失敗。不免遺惡名於歷史上也。然袁氏之成功與否。實難豫定。故其進退亦難立斷也。可見支那之上流人士。對於歷史上。關顧自己之地位甚深。自能使其就善去惡。此種觀念。各國民間。實未多見有此類例也。

支那國民之視編纂國史。爲一種重大之事業。殆出吾人豫想之外。是繼紹人文至大之原因也。因編纂國史。專設一獨立之官衙。網羅國中之學者。從事編纂。視爲政府重要之事業。歷代

未嘗廢止。現在之共和政府對於前清之遺物。不特竭力保存。且劃出一部之政費。並設清史館與國史館。近日雖因經費支絀。暫時歸併於文科大學中。然決非裁撤也。其故無他。恐國史失修。則人文繼紹上必生斷缺。而支那國民所以能冠絕世界之要素。亦因之消滅也。

第六節 文明繼紹之第二方便(文學)

茲所稱爲文學者。以言語文字顯其調和之美。即詩文是也。所謂調和之美。非實物。乃關係也。此種關係。只可以意會之。不能形諸言語。古來有以數字表示調和之關係者。如易之繫辭上傳第九章。及希臘皮達哥拉斯哲學之類。蓋周易之目的。在以陰陽二氣種種結合之程度及形式。說明人生事物之調和與

不調和之理。其所用以表示調和之美。非以數字。即以記號。惟專門家能解之。至於普通人則欲解之殊難。今有一法。可使普通人亦易於理解。其法唯何。即凡調和之事物。概用調和之文字。或言語。具體的表示之。令人聞其言語。或讀其文字。即可想見其事物而感覺其調和之美是也。夫詩文者即以調和之外形表示調和之意思者也。聖人因易卦難解。乃藉火水龍馬山澤等具有陰性或陽性之有形物。著爲文章。具體的說明之也。由此觀之支那之所謂「文」本有二種意義。其一爲天文人文之文。即含有文明之意義是也。其二爲文學之文。即以言語文字。說明調和之事物是也。余於此不能不歎支那之「文」與希臘之

「羅格斯」其間自有相契合之處。蓋希臘之所謂羅格斯本含有言語與道理之意義。即物之道理既爲無形。惟言語可以表示之。則言語之字中自不能不含有道理之意。如英語之論理學。生物學。社會學等各語源是。由此例。彼調和之關係亦無形也。惟詩文方能表示之。則「文」之字中。亦含有調和與詩文之意矣。支那文學與政治關係甚大。蓋政治家經綸社會調和事業而現之於事實之謂也。巧於經綸之者。謂之聖人。巧於實行之者。謂之賢人。即凡施行政治。必先於心中立調和之經綸。而此經綸爲無形之物。則必發爲文章。廣示羣衆。或請其贊成。或強其服從。而述此調和善美社會之方法。又必須以善美之文章。若

拙於文章。必至其政策亦形其拙。故有志於支那政治者。必爲文章家。政治之重文章。世界中殆無其比。惟法蘭西稍覺近之。雖然。文章之美。非一朝一夕所能躋也。必以古典籍詩文爲材料。再鎔鑄之爲詞藻。此種事實。昔日如是。今日共和。仍復如是。支那官署。必有以文章進身立於要路之祕書。支那今日之政府公報。實一近代文集也。此文學政治學互相關聯。而爲文明繼紹方便之一也。

第七節 文明繼紹之第三方便(金石)

古物雖爲各國國民所同好。然其間有許多之差異焉。有祇作一種骨董品而賞玩之者。有借以流傳古代之文明。而開使後

世繼紹文明之方便者。支那國民之考究金石。即此例也。所謂金石者。即指鐘鼎尊彝碑幢等之金屬物品與各種石製之器物而言也。大概均刻有與時代有關係之文字。全國各地。金石豐富。又善於語古。一般國民尊重金石之念甚深。世界殆無其比。支那各省各縣。隨地皆有金石。即足不出戶者。亦得遭遇。其由土中井底發掘而出者。幾無年無之。宋以來學者。且將其所得著爲巨冊者甚多。如歐陽修之集古錄。趙明誠之金石錄。李遇孫之金石學錄。劉喜海之金石苑。王述菴之金石萃編等。尤其著名者也。其集錄一地方之金石者。又有劉喜海之長安獲古編。楊守敬之湖北金石志等。其惟集錄一時代或一種類之

金石者。則有馬邦玉之漢碑錄。吳大澂之古玉圖考等。此外尚有金石之收藏家。圖錄自家之收藏。而公諸同好者。如吳雲之二百蘭亭齋金石記。端方之陶齋吉金錄等是。金石無論如何豐富。倘不與國民現代之文明相關。則其價值亦因之而減。譬如埃及之金字塔。金石之著名者也。然與今日之埃及人實無絲毫之關係。至支那之金石則不然。由其最古者所刻之文字。漸次轉化。成爲今日文字之次第。得時確追究之。至其所記之事實。亦可與歷史互相印證。以補歷史之缺漏。若使支那國民中途爲他族所征服。混入他族之文華。何能如此乎。此余所以不能不歎以文字繼紹之支那文華之優於以

言語紹續之他國文華也。夫日本及西洋字母。均不過發音之一種記號而已。非文字也。故以此綴成之言語。亦祇可視爲一種言語之記號。非文字也。所謂文字者。每個須各有其固有之意義。方可。蓋文字者即意義之記號。非言語之記號也。言語多隨時代而轉化。而文字之意味。雖亦不免有多少之變化。然比之言語轉化。則甚輕微。故眼爲用(即文字)之國民。較之以耳爲用(即言語)之國民。其對於古代文明之繼紹。遙在有利之地位也。現今世界中。以文字傳述古代之文明者。唯支那國民而已。古代羅馬人之言語。因中途轉化甚烈。非通習拉丁語者。無由知古代羅馬之文華。其不便可想而知。故將古代文物所關係

之事跡。刻以文字之支那金石。其於繼紹文明上。實爲有力之方便也。

支那金石中最重要者。碑帖是也。碑即墳墓廟祠中刻文所建者。帖即古人墨寶之流傳後世者。夫碑之所貴。在所錄之事實。多係古人之傳記。及廟祠建築之由來。堪爲歷史之材料。且皆一時善書者爲之操翰。故用爲法書。亦有價值。如王羲之之蘭亭修禊序。王獻之之洛神賦等。帖之秀逸者。及歐陽詢之九成宮醴泉銘。虞世南之夫子廟堂碑等。碑之卓越者。俱支那書學之典型也。支那國民所以能繼紹古代文明。與寶愛金石有密接之關係。思之頗有深遠之旨趣。欲知支那者。又豈可不注意

及之耶。

第八節 支那文明與日本文明之關係

觀以上各節所述。支那國民係以歷史。文學。金石三者。繼紹古代文明而至今日。故其文明在近世國民中。不免屬於舊式。歐美諸國民不知其文明之真價值。祇見其進運遲緩。遂目之爲老朽國民。亦無足怪也。以是之故。支那於對外關係上。不免處於危險之地位。今欲救支那出此地位。非先理會支那文明之真價值不可。能理會之者。唯日本耳。吾所以於此不能不講究支那文明與日本文明之關係焉。

就事實言之。支那文明者。非獨支那國民之文明。亦日本國民

之文明也。吾之言此。乃根據歷史上之事實。非有意揚支那而抑日本也。

日本由神武天皇紀元。直至崇神天皇。凡五百六十四年。天下無事。其間孝靈天皇之時。雖傳有秦人徐福者。率童男女一千人。齋三墳五典來我國之說。然是說未必可信。當時秦之威力已及於朝鮮。至始皇歿。天下大亂。燕趙之民。多避難於朝鮮而已。故崇神天皇時代。天下所以多事者。即因朝鮮民族爲支那民族所壓迫。漸侵入我國西陲故也。神武天皇紀元六百二十年以後。大陸民族經朝鮮半島。侵入日本九州者漸多。仲哀天皇興戰不利。崩於是役。其后神功。征服三韓。支那國民之文物。

遂得經三韓而偕至日本。現日本和歌山縣伊都郡隅田村神社。隅田八幡所藏之神鏡。背面刻有篆隸兩體文字。是鏡之爲韓製。抑爲日製。學者初無定說。然伊都八幡。實神功皇后征服三韓凱旋時駐輦之所也。故是物之與支那文明有關係無疑。至神功皇后所生之應神天皇時代。三韓中新羅百濟二國。年年入貢。其歸化人多以各種技術傳之我國。百濟博士王仁率冶工。織工。釀工等來歸。獻論語及千字文。日本始有文教。仁德天皇。遷都難波（即今大坂）。即因其地爲良港。便於海外交通也。開國以來。皇居尙屬茅茨。至此時始漸趨於華美。上覆瓦而下砌石塔矣。蓋對於外國使臣。有保持威儀之要也。自此一百五

十年。至雄略天皇之時。即支那劉宋孝武帝大明元年。至齊高帝建元二年時代。即日本最初之文華時代也。當時有韓人等率通曉工藝之部下來歸者。極見優待。特賜以土地。而取其所產之工藝品物奉之朝廷。日本紀元千二百十二年。欽明天皇二年時。由百濟傳入佛教。同時支那南北朝之文華亦相繼傳入。推古天皇以後。直與隋朝交通。我國禮儀亦具。遂遣學生留學於支那。隋亡唐興。太宗以文教立國。內外學生游長安者八千人。日本學生高向玄理。僧旻。曩隨遣隋使臣到長安。至唐貞觀十四年始歸。任爲國博士。參與新政。日本向行族制政治。凡大族宗家之長。均得承襲官職。至是始廢之。倣唐制。依選敍考課之法。以任免官吏。由是孔子所

大成之社會調和之理想。亦爲日本文明之基礎矣。唐高祖永徽四年。我孝德天皇白雉四年。日本使節始至唐朝。其後因唐末之亂。至我寬平四年。乃依菅原道真上奏。廢遣唐之使。然此二百五十年間。往來未嘗斷絕。又僧侶之隨遣使入唐者。及歸國之後。多建立伽藍。開設宗門。如僧空海者。號弘法大師。通學善書。開建高野山。尤傳達支那文明最有力者也。日本既由遣唐使及留學僧。輸入唐朝燦爛之文明。爲奈良一代之文物。又倣唐之永徽令。制定太寶令。此令在政權未移入武門之前五百五十年間。盛行於全國。即政權移入武門以後。而京都公家。直攝於天皇不受德川幕府節制之縉紳。尙奉行不斷。

以京都爲國家中心我平安朝之文明。乃太寶令之文明也。即發源於唐朝之者也。源賴朝以武士總長之資格收攬政權。設幕府於鎌倉。懲於濃厚華奢之京都文明之積弊。遂變爲清淡質素之鎌倉文明。然鎌倉文明亦非日本所自創者。實乃當時禪僧所輸入之宋元時代支那南方之文華也。元寇以後。支那文明之在日本者。其勢稍衰。及足利氏代推倒鎌倉幕府。自開幕府於室町。清素之鎌倉樣文華。又一變而爲沈鬱驕奢之室町樣文明。足利氏由財政上之必要。屢與明朝往來。甚至將軍義滿親服明裝而見明使。日本今日唐宋書畫之多。大抵係於室町時代明商所輸入者。室町幕府衰亡後。成爲群雄割據時

代。戰亂無已。時織田氏。豐臣氏。輔佐天皇一時得爲統一之治。然無文學素養。不知以文教爲政治之基礎。故其權力不能永續。人亡亦亡。德川氏有鑑於此。凡僧侶之有文學者。家康均任爲顧問。徵集京都縉紳所保存之舊記。立爲法度。藉以調和當時之社會。（當時社會合公家即京都縉紳。武家即割據及寺社即神官及僧侶而成。得成霸業。更唱文武並重之主義。令武人亦修文學。命諸侯設立學校。登用儒者。江戶幕府二百五十年之基礎。於是乎立。德川幕府欲鞏固海內之統治。遂取鎖國主義。禁止人民與海外交通。只劃出九州一隅之地。（即長崎）爲支那商人居留地。許其貿易。是時有水戶侯者。酷嗜支那文學。聘明朝遺民爲教師。朝

夕講解。所以德川氏所創之江戶文華。多出知名之學者也。觀以上所述。可知日本國民對於支那文明之關係。較之歐洲現在國民對於希臘羅馬文明之關係。尤爲密接。殆與北美合衆國國民對於英國文明之關係相類似。孔子爲支那國民之先師。我日本亦仰爲先師。仁義禮智忠信孝悌爲支那之道德。我日本亦奉爲道德。李杜韓柳爲支那之詩文家也。我日本尊崇之之心。較之自國詩文家尤厚。如其文字。亦用以爲我國之文字。然則日本人對於支那文明之產物。殆無彼我之別。即謂之與支那國民共通。亦無不可矣。

第九節 支那文明與日本文明之差異

日本與支那。異其國土。異其歷史。故兩國之文明。亦有多少之差異。此自然之勢也。蓋兩國國民之國民的存立。已異其出發點。此余所曾唱道者也。日本島國也。其初由海外遷入者。皆屬同一種之民族。此民族之原住地。今無可考。歷史上則稱之爲高天原。故有高天原民族之稱。高天原民族最早入日本之一部族。繁殖於本島北海岸。其次入日本者。占據大和之地。然於血統關係上皆屬末流。惟最後遷入九州之一部族。方爲本流。其族長在血統關係上。已有使他二族服從之權利。神武天皇即爲此中心部族之族長。統率全族東征。北海岸之部族。不戰而降。大和之部族。戰敗而服。神武天皇。定都橿原。號令天下。此

無復可爭之血統上嫡庶本支之關係。成爲我國民開國之基礎。因國民皆同姓。故同姓不婚之習慣。無由成立。支那大陸國也。其情形與日本迥異。漢民族之各部族。沿水流而入中原。各部異其姓。故有同姓不婚之戒。且各姓皆立於對等之地位。初無本支之別。甲姓之嫡長。無統御乙以下各姓之權利。約言之。即不能以血統上之關係團結異姓爲國民也。故國民大團結之主長。欲於血統關係以外。求其所以統馭異姓之資格。第一雖爲武力。然武力在人一生中。有盛衰之變。徒恃武力。不能持之久遠。必須加以異姓民所敬服之文德。方可。文德有種種。支那上古帝王之教民也。或以醫藥。或以農業。或以火食。或以結

婚。或以建築。是皆文德也。其中堯舜二帝。尤善於調和社會。對於許多姓族。能應其勢力之大小。各與以適當之地位。使其滿足。是豈非「平章百姓」元來之意義乎。可見支那古帝王調和社會之理想。早已發達。所以能統御異姓也。

日本君主之所以爲君主。在於爲全國民之宗家嫡長也。故莫大且先於維持嫡長之血統。以防血統之混亂者。萬世一系皇統連綿之必要。即在於此。支那則不然。爲人君者。以能調和社會爲要素。果能實行以德。則天下文明。人文之發展。必燦然可觀。唯是傳之日久。不免流於虛禮。虛儀。君民之智力同時衰退。則劣情發動而世亂矣。故必時爲變通。使人心刷新而後可。間

有中興之君。出而挽回。雖有時成功。然大抵非從根本改革。難致昇平。支那歷史上統代之多變。原因即在於是(革命是也)。以上述之理推之。則日本文華與支那文華相異之點可以明矣。日本之社會調和。非在人爲的。係以自然順序。由一家族變爲一大家族(即氏族)再變爲一大民族也。故不必以人爲的儀禮而裝飾之。而支那之民衆團結。非本自血統之自然。乃基於調和之理想。故統率不解此理想者。有以儀禮文飾之必要。日本國民之愛質實。支那國民之重文飾。其理由即在於此。故支那之建築物。羣飛丹刻。多燦然炫目。而日本之家屋。祇質素之白木造成。此亦一端也。

日本與支那國民團結之徑路。既如此不同。故其文明之傾向亦異。若能互相理解。則於社會調和之大道。不妨相一致也。且尊重文飾之支那文明。亦有特長之處。余日與支那國民相處。見其臨機應變。能於無可調和之中。想出調和之法。使人起好感。此點到底非日本人所能及也。先年余曾目擊一事。茲姑述之。即二百六十餘年間。清朝歷代帝王舉行即位典禮之太和殿。竟用之爲民國第一任大總統就任之式場是也。此我等日本人殆想不到。當時日本人皆以行之國會爲宜支那人將太和殿之匾額蔽以彩緞。上綴禮殿二字。舊寶座依然不動。大總統即立其前。宣讀誓文。文武百官及國會議員。各省代表。皆立於前面。與大總

統交換三鞠之禮。而與共和之意味亦無何等不合。又支那國民與日本人不同之點。尚有一事。即支那人喜結構新設而不喜修理保存也。日本人因保存萬世一系之皇統。推之他物。皆有保存之熱心。見支那內地各處美善之宮殿樓閣。多任其破壞。無不心滋疑惑。雖然修理難而建設易。故習於調和工夫之支那國民。寧取建設之易。不爲修理之難也。

第十節 結論

就以上數節所分別概論者觀之。支那國民之存立的基礎。數千年來未嘗稍衰。近年雖有政治之變化。然不過表面之現象而已。其根柢則未曾動搖也。日本文明與支那文明。其源流既

合。故互相體會亦易。如西洋各國民則反之。對文之理想。及皇統連綿。究難體會其價值。故日支兩國民。不可不相依相助。護持其文明。以備西洋方面迫來之危險也。

現有一物。起自西洋各國民之中。足以破壞日本及支那文明之基礎者。厥物唯何。曰平等主義是也。西洋各國民只知分析。不解保合。人類社會一分析之。唯個人耳。個人皆平等也。欲使個人各發展其人格。至於盡致。非全脫離人爲的束縛。人人皆得自由競爭不可。西洋各國民所遵爲大道而致富強者。即此也。惟是人世之目的。苟徒可以富強爲滿足。則西洋之文明誠爲獨一無二之正道。而日本及支那之文明。皆爲歧路。殊不知

人生於富強之外。尚有可尊重者在。即以人類天賦之靈智。練成保合之工夫。使人世盡得其調和之美。而進於與天地自然相通之大道是也。西洋人不解此理。徒醉心於富強。銳意擴張其平等主義。今其說已東漸矣。日本支那爲此潮流所磅礴。有非常之危險。文之理想或因之而破。皇統連綿之價值或因之而減。是中日共同之危險也。唇齒輔車。可不相共綢繆之於未雨之前乎。

雖然文之理想。苟更推廣論之。則平等主義。亦未可排斥。是亦獨具深趣之人生一大義也。不特此也。地球之表面。雖似廣濶。而實甚狹隘。其大部分已爲平等主義之強國所占。不能與之

相容不能兩立之文的理想。及皇統連綿之事實。未免褊狹。必須研究一能相容能兩立之方法。而後文的理想及皇統連綿之事實。乃得稱爲完全。

立憲政體。乃西洋各國之政體。本自平等主義者也。而日本採用之。使與皇統連綿同進於並立之途。支那之共和政體。亦本自平等主義。固不待言。現今支那時因文之理想與平等理想之衝突。而起種種之波瀾。此種形勢。或尙須繼續數年。亦未可知。雖然吾人敢信其四千年來繼紹之文的理想之根柢。必不因之搖動。蓋經四千年薰陶之支那國民之文的天才。余之信賴甚深。數年之後。必能調劑成一不背於平等主義又深合於

社會調和理想之共和政體。一方面與日本相容。他方面又能與西洋各國並立。開一新天地於地球之上。余可斷言也。

漢譯
支那正觀終

附錄

- 一、文學論
- 二、聖門哲學論

保合之和以
正寤起煥乎



Tokyo July 2nd 1885

Dear Mr. Ange

Many thanks for
 your opening essay in the study of
 Chinese Philosophy. I congratulate you
 on having brought a new method to
 bear on this most important subject.
 Your discoveries as to the meaning of
Wan are positively startling; and if you
 can substantiate them before the
 learned world, you will be doing the
 cause of Eastern civilization an immense
 service, that Wan is the analogue of
 the old Greek logos, and that Confu-
 cian Philosophy embodies a system of
 Synthetic Logic, is something foreigners
 have never suspected, I think. You are
 right in your view that the prevail-
 ing phase of Western intellect is too
 exclusively analytic. Does Confucius
 really possess a medicine for this dis-
 ease? I await your next instalment
 with eager interest -
 Yours very sincerely
 Ernest F. Fenollosa

一三九

美
 秋
 葉
 色
 其
 文
 在
 人
 心



一三八

支那哲學論文の發端を寄せらる多謝爰に一新論法を以て此の最緊至要なる事項を討究するの緒を開き得たるは足下の爲に祝する所なり文の意義に關する發明に至ては實に驚嘆に堪えず若し此の學者の爲に之を指實することを得ば東洋文化に對して甚大の勳功とや謂はむ文の字は古代の希臘の「ロゴス」の原義に相當すと云ふ事並に孔門哲學は保合論の系統を囊括すと云ふ事は外國人の曾て思ひよらざりし所なりと信す方今西洋に盛なる智力作用は分解に偏する甚しきに過ぎたりと爲すの見解の如きも其當を得たり孔夫子果して此の病に投ずるの藥劑ある歟敢て次篇の寄道を渴望す

東京一千八百八十五年七月二日

エルネスト、エフ、フエノロサ

明治十八年九月

澁澤宣三書

文學論

緒言

本邦の文化源支那に出づ、神后征伐以來三韓を経て漢魏の文化を傳へ、小野妹子歸朝以來専ら隋唐の文物を傳ふ、藤原鎌足三朝に歷事して、大に氏族の制を革め、唐制に倣て朝綱を畫す、國體稍定形あり、藤原氏世世祖先の意を繼て皇室を輔佐し、傳へて五百十年自大化元年の久しきに至る、其間律令格式略は整ふ、養老天平の隆盛、貞觀延喜の華美、粲然として觀るべきあり、降て中古兵亂の世と爲るに及ても、霸威を張る者、必ず干戈の餘暇文物を支那に求めざるは無し、北條氏の宋に於ける、足利氏の明に於けるの類これなり、徳川氏二百五十年の治平儒道を以て根基とすといふこと、既に識者の許す所なり。然るに世運一變して維新の事あるに及ては、歐米

諸國に習ふの風大に起り、天下靡然として之に嚮ふの色あるより、聖門の學教は人の忽棄する所と爲り、舊來の文明は世の蔑斥する所と爲る、君臣平權の論、父子等權の説、夫婦同權の辯、相應して出づ、政黨樹立の舉に至て殆ど其極に達したり。昨今に至りては、激動稍減するの色ありと雖も、天下の形勢尙ほ未だ定まらず、人心東西の文化の間に逡巡して、去就の分決せざるに似たり。支那の文明にして到底立つの地無きものなること明瞭なるがゆゑに之を蔑斥すれば則ち可なり、其未だ明瞭ならざるに臨て、只だ一朝一夕の事變を見て急突に決するは不可なり。支那三千年の文化果して一大失策なる乎。君臣父子夫婦兄弟朋友の道、果して黄色人種の幻夢なる乎。日本舊來の文明は、西洋傳來の開化と、氷炭相容れざるもの乎。若し必ずしも兩立し難きに非すとせば、何をか支那の文明に取り、何をか西洋の開化に採らむや。請ふ左の數節に於て試に是くの如き疑問を解答せむ。

何を解答せむ。

第一節 西洋の開化は理學に因る事

是くの如き疑問を解答せむと欲せば、必ず先づ東西開明の趣を異にする所、いづくに在るやを究定せざるべからず。西洋の開化たる、其由て顯るる所千緒萬端なりと雖も、要するに理學の一に歸すること明白なり、是れ唯だ推論の順序を整齊せむがため此に言はむことを要するのみ、今さら憑證を竣て知るべき事に非ず。化學、物理學、重學、地質學、生理學に因て農業、製造、採鑛、航海、運搬、音信、衛生の知を致せしこと、誠に言語の得て盡す所に非ざるなり、蒸氣機關の發明に因て世界一變したりといふこと、常に人の謂ふ所なり、而して近頃は電氣機關の發明に因て世界再變せむとす、是れ兩ながら理學の賜ものなり。我國の如きも、天保の往時と、明治の今日

とを比較すれば、今日を以て優れりと爲す所以のもの、大抵理學上の製作器用を傳來せしに因らざるは無し。支那の英佛と戦ひて勝つ能はざる所以の者も、多くは理學上の知識を缺くに因ることとす。又單に禽獸草木金石に關する知識進歩せしのみには止まらず、人類交際の事に至るまでも、理學上の討究に因て大に修良あらむとす、例へば理財學の如きこれなり、此の學一旦出でてより、交易上の知を致せしこと、敢て輕少なりとせず、心理學の如きも、日に確實を加へて、教育及び其他の事物に應接するの道を明にせむとす。

第二節 理學十分の文化を致すに足らざ

る事

されば國の文化は單に理學のみに因りて極處に到らしむることを得べ

き者なりやと問ふに、答へて曰く、然らず、理學上の發明は之を善き道に用ゐることと得べく、又惡き道に用ゐることと得べし、是を以て必ず理學の外に人をして善を爲し惡を去らしむる者無かるべからずと。譬へば巖石を裂て新道を開く爲め爆裂藥を用ゐるは善き事なり、されど魯西亞の虛無黨の爲す如く、人を殺すため之を用ゐるは惡き事なり。又文化進むときは戦争止み、四海浪靜ならむことをこそ願ふべきに、却て益、機巧なる兵器を發明せむことを務むとも、是れ必ずしも理學の本色に非ずとは謂ひ難し。さればこそ甲、水雷船を發明すれば、乙、水底を走て水雷を探知する船を創製し、丙、輕氣砲を工夫すれば、丁、空中を飛行して輕氣砲を破碎する具を創作せむとす。勢斯くの如くなるときは泰平の世果して期すべき乎。競争は進歩の誘因なり、泰平は蠻夷の遺風なりと言ふ人あれば、余輩は與に語らむことを欲せざるのみ。之を要するに、國の文明をして極

處に到らしめむと欲せば、理學上の發明の外に、天下を經綸して互に惡を去り善を爲さしむる所以の者無かるべからず、概して謂へば網紀これなり。

第三節 網紀を理學に因て正すの不當なる事

先づ當時西洋に於て網紀を正さむがため用ゐる所の法の正當ならざることを證明せむとす。西洋に在ては理學の功斯くの如く夫れ大なるを以て、人皆理學に沈醉し、天下を經綸する所以の者たる道德、政體、法制等に至るまでも、理學の一部として之を討究せむとせり、即ち英語にて「モラル、サイエンス」又は「エシックス」と曰ふは道徳、理學の義なり、「ポリチカル、サイエンス」又は「ポリチックス」と曰ふは政事、理學の義なり、「サイアンス、オブ、ロー」又は「ジュリス、ブルデンス」と曰ふは法律、理學の義なり。若し果して此等の

理學にして完備に至る上は、網紀を正す所以の十分なる基本と爲り、敢て他に求むべき所無き者ならしめば、支那三千餘年の文明は一大失策なりと謂はざるを得ず、倫理、政理、法理の學にして果して結局に達すべき者ならしめば、唯だ理學のみ能く開明をして極處に到らしむる者なりと謂はざるを得ず。されど細密に繹思するとき、其當に然るべからざるを知るべし。是れ實に緊要の點なり、讀者請ふ潛心留意せよ。當に然るべからずとする所以を約言せば、理學の神髓は形象畫定せる者を分解するに在りといへども、網紀は此の分解に因て正すに由し無き者なりといふ事これなり。

理學の神髓、分解に在る事は西洋の學者も自ら許す所なり。英人理學の大家を指して「グレイト、アナリスト」と言ふ、大分析家の義なり。理學の主として勉むる所は原因を究むるに在り、然るに宇宙の現象は常に數條の原

因の俱發に由て生ずる者なるを以て、今其原因を知らむと欲せば、必ず此の現象を分解して、甲の原因に由る所と、乙の原因に因る所と、丙、丁、以下の原因に由る所とを辨別せざるべからず、之を物理を究むと謂ふ。化學は物質を分解して酸素、水素等の元素に歸する者なり、物理學は物體を分解して、電氣、引力、温熱以下の性質に歸する者なり、重學は勢力の發作を分解する者にして星學其一科なり、生理學は動物の生活を分解して生殖、營養機關の官能、自然及び人為の淘汰等に歸する者なり、理財學は交易の現象を分解して需要の緩急、供給の多寡、競争の自由、貨幣の分量等に歸する者なり、心理學は心意の作用を分解して感覺、知覺、注意、記憶、智力、想像、斷決、意志、情操等に歸する者なり。

さて此の分解の法にして、果して以て綱紀を正すに足る者ならしめば、理學は開明をして極處に到らしむるの機械にして、支那三千年の文明は一

大失策なりと謂はざるを得ず。然るに分解は以て綱紀を正すに足らざる者なり。請ふ之を説かむ。今若し綱紀を正さむがため分解の法を施さむと欲するとき、果して何を分解して之を正すべきにやといへば、必ず「人」の外に其物無かるべし、物質の元素を知らむとする化學者は物質を取て分解し、物體の性質を究めむとする物理學者は物體を取て分解する如く、人類の綱紀を求めむとする者は、人類の性情、即ち人性西洋論者の、ヒューマン、ネチアスを譯して人性と云ふ、儒者の人性と同じからず、此に取て分解するの外無し。然るに人性なる者は物質の元素、物體の性質の如く初より畫定して變せざる形象ある者に非ず、必ず綱紀に従て動く者なり、物質の元素は化學に依て異ならず、物體の性質は物理學に依て異ならずと雖も、人の性情に至ては然らず、必ず立つる所の綱紀如何に因て異なり。澳太利人の間に現るゝ性情と、印度人の間に現るゝ性情と、英吉利人の間に現るゝ性

情と支那人の間に現るゝ性情とは一一差異あること目前の事實なり、然れば則ち其何れを以て眞の人性「ヒューマン」とすべきや。網紀は前にして人性は後なり、是れを以て人性を分解し、其得る所を根據として網紀を正さむとする者は、前後の次第を誤るの譏を免れざるなり。網紀は前項なり、書定せる人性は後項なり、網紀先づ立つに非ざれば、人性書定せず、其書定せざる人性を取て分解して、之を書定する所以の網紀を立てむとするは何の事ぞや。

第四節 西洋の倫理、政理、法理、萬古不易なる能はざる事

上述の次第を考ふるときは、當今西洋の學者が分解の法のみ因て立てむとする所の網紀、即ち道德、政體、法制の萬古不易なる能はざる所以を知

ることを得べし。彼等人性を分解して網紀とすべき者を索めたり、然るに其分解せし所の人性は果して何如なる人性なるやと察するに他無し、彼の基督教に因て定形を得し者是れなり。基督教に於ては、六合の間、一神萬人あるのみ、一神に對しては萬人同格なり、世に人君無し、只だ上帝あるのみ、世に父母無し、只た神父あるのみなりと説けり。千餘年の間斯くの如き教法の薫染を被りたる人の性情を分解せしことなれば、其中に君臣父子夫婦兄弟の道を見ざりしも、亦怪むに足らざるのみ。ルーソーは民約説といふを唱へ、衆人社會を結成するの間、之を網紀と指すべき者絶えて無し、只だ人我れを害せざれば我れも人を害せざるべしとの約束あるのみ、豈に君主といひ下民といふが如き差別を保障すべき理あらむやと言へり。往時佛國に「フィジオリット」理物學派と稱する經濟學の一派ありたり、其論旨を述べたる書に曰く、

「造物主の目的は人類の生存、繁殖、安寧、開化を謀るに在るや明白なるを以て、人は必ず生來當に智慧を具ふるのみならず、又此の目的に應ずる所以の天性をも具ふべきなり、是れ即ち人皆安寧を求むると、交際を好むと、公道權利を權利とし義務を義務とする事を行ふとの三性を賦與せられたるを自ら知らざるは無き所以なり、乃ち思へらく、獸類の如き孤立獨居は其心性體質に適せず、同類と會合群聚し、相親愛し相和睦して生活するは其心性體質の然らしむる所なりと、又思へらく、他人も自己と欲望を同くするを以て其權利も亦自己の權利に等しからざるを得ず、故に自身先づ他人の權利を重じ、以て他人をして亦自身に對して同一の義務を守らしめざるを得ず」と。

英國法律家の泰斗ベンサムは功利教と曰ふを立て、人性を分解するとき、君臣父子の差別を見ずといへども、各人幸福を求むるの趨向は必ずあ

り、故に務めて多數の人に務めて多量の幸福を興ふること、是れ徳なり義なりと説けり、現に英國の立法は大抵此の主義を以て基本と爲すといふ。彼れの所謂權利義務なる者は何ぞや、是れ畢竟一國の人皆同格にして父子君臣の差別を保維すべき理無しとする分解法に因て立てたる綱紀なるのみ、若し其綱紀にして果して萬古不易に非ざる上は、權利義務も亦不易に非ざるなり。世の事理を辨せざる者は以爲く、天下に法律より尊き者無し、法律完備せば文明極處に致らむとすと、而して其斯く信するは人に君父無しとする基督教を信するに等しきことを知らざるなり。但し基督教の正否何如は此處に於て論すべき事に非ず。只だ此處に於て會得すべきことといへば、理學即ち既に定形ある物を分解するの學に因て立てたる綱紀は前後の次第を誤まるの故に萬古不易なることを得ずといふの一事を出でざるなり。又余輩は決して道德、政體、法制の理學を以

て世を益せずと爲し、或は立つ能はずと爲すものに非ず、只だ當今西洋の學者社會に於て往々行はるゝ倫理、政理、法理の論は、先づ基督教の遺物たる無君父論を以て確實なりと爲すに非ざるよりは、取るべき者に非ず、若し只だ理學のみに因る者なりと爲すときは、決して立つの理無き者なりといふことを明示せむとするものなるのみ。

斯く説き去るときは、西洋の理學、有効は則ち有効なりと雖も、未だ以て文明をして極處に到らしむるに足らざるものなること明白なり。次に進て支那三千年の文明は必ずしも一大失策に非ざることを證明せむとす。

第五節 保合に因て綱紀を正すの正當なる事

る事

綱紀を分解の法に因て正すこと果して不當なりとせば、如何なる法に因

て之を正さむやといふに保合の法を措て取るべき者亦有らざるなり。凡そ事論する法は分解に依らざれば必ず保合に依るべきこと既に定まり、事なるれば此に對せず、保合はシモンセスにて分解アナリシスの反對なり、翻譯者從來綜合の保合は分解に反して現に定形ある人性を取て割析せず、將來應に有るべきの趨向を察して構綴するの法これなり。應有の趨向とは未だ必ずしも定形を得ずといへども後に畫定せる形象を得て外に表れむこと難きに非ざる趨向をいふ。是くの如き趨向は、其類其數に定限無きものなり、其中に就て善く調和會通して人世の規矩と爲るに足る者のみを採擇し構綴して統紀整頓せる一體の規矩と爲すこと之を保合に因て綱紀を正すと謂ふ。例へば祖先を敬すといふ事、君に忠なりといふ事、父に孝なりといふ事、夫に貞なりといふ事、兄に悌なりといふ事、友に信なりといふ事も、不敬、不忠、不孝、不悌、不信なりといふ事も、皆人類應有の趨向なり、其中にて忠、孝、貞、悌、信を採擇して保合し、不忠、不孝、不悌、不

信を排除せしは是れ支那の綱紀の建立法なり。斯く爲すに何の不當なることかあらむや、如何ぞ之を以て前後の次第を誤るものと爲すことを得むや。斯く保合する人之を聖人といふ、保合して得たる所之を文といふ、而して其保合するに臨ては、人類に比すれば高貴遠大なる者、即ち天を以て模範と爲すこと、自然の勢なり、「觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下」とは豈に是の謂ならざるを得むや。文は文采なり、文章なり、和語を以ていへば「あや」なり、君臣父子夫婦兄弟朋友一一其趣を異にしなから、常に調和して家を成し、社を成し、郷を成し、國を成すの俗、粲然として觀るべきものあること恰も日月星辰寒暑陰陽一一其趣を異にしなから、曾て錯列を紊さず、代變を誤らざるの美なるが如くなるをいふなり。其形容を言へば文なり、其離れ難く違ひ難きを言へば道なり、文と道とは同體異觀のみ、さればこそ堯の治道を稱して「煥乎其有文章」と曰ひ、文王没して道尙ほ

亡ひざること思ひて「天之未喪斯文也、匡人其如予何」と曰へり。

文明といふも、其字義を以て推すときは、人文著明といふことに外ならざるなり、吳徵曰く「文明者、文采著明、在人五典之叙、五禮之秩、粲然有文、而各安其所」と、文の意義深しと謂ふべし。

此文即ち綱紀を正すの次第を述べたる者は、大學これなり、大學の論法は、果して分解に非ずして保合なり。物格而后知、至は保合の第一段なり、知至而后意誠は保合の第二段なり、意誠而后心正は保合の第三段なり、心正而后身修は保合の第四段なり、身修而后家齊は保合の第五段なり、家齊而后國治は保合の第六段なり、國治而后天下平は保合の第七段なり。是の如く傳次保合して、小より大に及び、本より末に到るの法は西洋の分解論理學「アナリチカル、ロジック」中に其例を見ざる所なり、而も一段一段確實に非ざるは無し、假令確實に非ずするも、西洋の論理を以て其確實に非ざる所以を證明せむこと難し

第六節 保合美なる事

支那の綱紀の建立法は上節開陳する如き道に出づる者なること争ふ可からず、此の事を知らざる者は、理學に因て萬事を計るべき今日に於て、支那の學問を修むること無益なりと言ふと雖も、是れ只だ分解あるを知て保合あるを知らず、譬へば木材あるを知て家屋あるを知らず、耳目肺肝あるを知て身軀あるを知らざるが如きの管見なるのみ。今此に彼の理學を愛敬する西洋人と雖も必ず喜ばざるは無き美術の事を述ぶるときは支那の文明の極めて美なる所以を感ずるに至り、併せて理學即ち分解の境界の外に、甚だ高貴遠大なる境界の在て存することを會得するに足るべし。美術とは詩歌、音樂、繪畫、建築、彫刻等の總名にして佛語ボウザールの直譯なるべし、されど其所謂美とは文の文たる所以と同一なることを知るな

り、何となれば美術の神髓も、文章の神髓の如く必ず保合と調和とに在ればなり。詩とは何ぞや、造化及人世の間に存する品彙萬形の中には調和するもあり、調和せざるもあれど、其調和せざる者を去り、其調和する者のみを取て保合し、調和せる節韻を以て之を述べたる者は是れ詩なり。樂とは何ぞや、鐘鼓琴箏の音聲の中には調和する者あり、調和せざる者あれど、其調和する者のみを取て奏し、彈する者は是れ樂なり。畫とは何ぞや、用筆、彩色、濃淡の中には調和する者あり、調和せざる者あれど、其調和する者のみを取て調和する主意を表現する者は是れ畫なり。舞とは何ぞや、體肢の動息の中には調和する者あり、調和せざる者あれど、其調和する者のみを取て調和する情操を表現する者は是れ舞なり。是れに由て之を觀れば、所謂美術なる者は文章の枝葉にして聖人の文章、即ち綱紀と、其類を同くすることたるを知るなり、宜なるかな聖人天下を導くに詩と樂とを以てす

ること。支那に美術の字無き所以の者、美術無きに由るに非ず、文章の中に西洋人の所謂美術なる者を全く包納するに因るなり。理學能く美術上の品物を生ずる乎。理學は分解して例へば音聲の調和するは一分時間起る甲の音の波動の數と乙の音の波動の數との間に一定の比率あるに因る事たるを發見す、然りと雖も是くの如きは只だ其理を得るのみ、決して其事を爲すに非ざるなり。之に反して音調の理を知らずして音樂に妙を得たる人、古今其例多し。近比は理學に因て書術を研究すること行はれ、彩色の美は斯々の理に因り、用筆の美は斯々の理に因るといふ事を論説す、然れども名畫は却て書論の前に出づといふこと獨り支那人のみならず、西洋人も自ら許す所なり。加之稍見識ある者は皆當今歐米に行はるゝ書風の物理に精なるも風致に乏しきを慨嘆して東洋の古畫を愛玩せり。理學と美術とは全く反對する者なり、何とな

れば、美術の美術たる所以は調和に在りて、調和なる者は物と物との保安合會に在るがゆゑに、之を感せむがためには、其物と物とを總括せざるべからざる次第なるに、理學に依て其理を究定せむとするときは、却て其物と物とを離別せざるべからざればなり、例へば名畫の如きも、或は書論に照し或は故實に徴して之を鑑識せむとするときは、忽ち愛玩の情を失ふなり。夫れ美術の要は人を感動せしめ、其心目を奪ひて、敢て他事あることを思はざらしむるに在り、是を以て其美なる所以を分解するの隙あらしむるが如きは既に美術の極處に非ざることを知るなり。

古人の書畫を品評するや、凡を出づる者を稱して「能」と謂へり、是れ只だ習練を積て至る所にして、分解の得て及ぶ所なり、是を以て之を下位に置く、其上に位する者を稱して「妙」と謂ふ、妙は不測の義なり、此に至りては獨り精巧のみに止まらず、習練の能く致す所に非ず、分解の得て及ぶ所に非ざ

るなり、然れども之を見る者尙ほ其不測を怪しむの情ありて、未だ全く我れ即ち怪有るを忘るゝに至らざるは、技術の盡さざる所以なり。次に眞品に至りて始めて極處に達する者とす、眞は神なり、書畫の此の品格を備ふる者に臨むときは、心目之が爲に奪はれて、敢て我れあるを知らず、醇醇然として恰も神境に遊ぶが如し、亦焉ぞ分解を容るゝの隙あらむや。書畫詩文を善くする人を稱して天才といひ、或は詩聖書聖などいふことあり、之を天といひ、之を聖といふも、是れ亦分解の得て及ばざる所、理論の得て究めざる所たるを以てなり。此等の事を以て見れば、天地の間に在て崇ぶべく重すべき者は、獨り理學上の分解法の能く盡す所のみ止まらず却て之に反對する保合の境界に屬する者に在るや明なり。然りと雖も保合の境界に在て崇ぶべく重すべき者は、美術のみに非ず、尙ほ之れよりも美なる者あるは何ぞや、綱紀これなり。前に綱紀は保合に

因て正すべき者にして、保合に因て綱紀を正すとは、人類の應有の趨向種無量なる中に就て調和する者のみを採擇し保安會合するの謂ひなることを述べたり、是れ夫の書を善くする者、字畫の應有の形狀種種無量なる中に就て調和する者のみを採擇して保合し、書を善くする者、應有の用筆、彩色、濃淡、種種無量なる中に就て調和する者のみを採擇して保合すると何ぞ異なることあらむや、唯だ人類の應有の趨向に至りては、極めて錯雜なるの故に、聖人を俟て始めて保合の業を全くすることを得べきのみ。美術既に聖人あり、人世は一大美術なり、能く天下の會通を觀、綱紀を作為し、大和を保合する者、豈に之を聖人と曰はざるを得むや、禮記に曰く「聖人作爲父子君臣以爲紀綱、紀綱既正、天下大定」と白虎通を按ずるに、三綱、君子、長、朋友也、和漢の文明、綱紀あり、文章あり、歐米の開化自由あり、理學あり、同權あり、東西の差別何ぞ夫れ甚しきや。論者曰く、綱紀、文章、君父は架空な

り、重するに足らずと、駭して曰く、試に夫の音楽を聴け、汝音調の美を以て聽くに足らずとする乎、分解すれば只だ一發一發の音聲あるのみにして調和と指すべき者無ければとて、之を以て架空なりとする乎、試に夫の名畫を見よ、汝粉彩の美を以て見るに足らずとする乎、分解すれば只だ一種の彩色あるのみにして繪畫と指すべき者無ければとて、之を以て架空なりとする乎、之を架空なりとするは分解あるを知て、保合あるを知らざるの管見に非ずや、汝唯だ理論に精にして文章に疎なるの故に天下定らず、黨議止まず、訴訟絶えざるに非ずや、汝若し我が美とする所を美とせむことを欲せざれば、則ち其好む所に從へ、然りと雖も我が美とする所を非毀するの効力は斷じて無きことを知れ、汝の理學も固より効多し、故に我れ之を採て我が美を補ひ、汝をして羨む所あらしめむと。

第七節 保合美なるが故に大なる事

保合の主とする所美に在り。斯道美なり、故に又大なり。美の要は調和に在り、調和にして未だ容れざる所ある者は調和の完全なる者に非ず、是れ大學の道は意より起て天下に及ぶ所以なり。斯道の能く容れざる所果して何かある。前に以て綱紀を正すに足らざる者なりと述べたる理學の如きも、却て聖教の全く容るる所なりとす。請ふ其故を説かむ。人は能く獨立する者に非ず、必ず事物の繞圍する所となりて生息する者なり。是を以て事物の趨向を知て之に應接せざれば、八の分盡き難し、致知在格物とは此の事なり。物とは我の境界の外に在る一切の事物を謂ふ、則ち無機物、有機物の理を究めざるべからず、是れ化學、物理以下諸科の理學の研究すべき所以なり。當今の支那人の物理に迂くして西洋人に苦

しめらるゝ所以の者は、聖教の過に非ず、却て聖教の精神に戻り、徒に經典の章句を修むるを以て道を修むる所以なりと爲すに因る事なり。又人の應接せざるべからざる所の者は、單に禽獸草木金石のみに非ず、社會の交際も亦其身に直接の關係ある者とす。人各、長所を異にするが故に、我れの長する所を以て彼れの長する所と交易せざるべからず、既に交易の事あり、亦必ず交易の理なきを得ず、是れ理財學の研究すべき所以なり。今日の社會は昔日の社會の化醇して至れる所にして、之に屬する人類の趨向は必ず其化醇の次第に依て異なり、而して人若し其趨向に戻るときは修身、齊家、治國の事全を得ず。前に保合に因て綱紀を正すとは人類の應有の趨向を察し、其中に就て調和會通する者を採擇構綴するの謂ひなることを述べたり、而して此の應有の趨向は大に國國の變遷に關係する者なり、是れ社會學の研究すべき所以なり。支那の史學は目的が如し、其稍異なり、後述に述ぶるが如し。

他分解の學にして研究すべき者枚擧に遑なし。

第八節 保合大なるが故に誠なる事

前節具陳する所に依て保合は大に致すを務むる者なる事既に明瞭なり。斯道大なり、故に又誠なり眞なり。大の要は能容に在り、若し斯道の容るる能はざる處に於て眞理なる者存するときは、調和未だ完きを得ず、調和完からざるは、文の缺なり、故に曰く、斯道は美ならむとするの故に大なり、大ならむとするの故に誠なりと。請ふ其誠に進む所以を説かむ。抑、保合の漸次廣大に進まむとするの勢あるは、猶ほ分解の漸次微細に進まむとするの勢あるがごとし。既に和を致して身を脩めたる上は、又進て家を齊へざるの謂れ無く、既に家を齊へたる上は、又進て國を治めざるの謂れ無し、國は天下の一部分なり、故に既に身を脩めて國に及ぼしたる

上は、又保合を天下に及ぼさざるの謂れ無し、天下は萬化の一部分なり、故に既に天下を經綸したる上は又保合を萬化に及ぼさざるの謂れなし。萬化を保合すとは何の事ぞや、曰く天下紛雜、矩規無きに似たりと雖も、其間に綱紀の正すべき者あるを見て之を正すが如く、萬化錯綜秩序無きに似たりと雖も、其間に終始の明にすべき者あるを見て之を明にすること是れなり、蓋し孔子の易道を贊明せし所以の者は在り、亦宋儒の闡大せし所も夫れ是に外ならざる乎。只だ人文を著明にしたるのみにては未だ盡せるものと倣し難し、人道を以て天道の一部たらしめ、天地萬物の間に於て確然として立つ處あらしめて後、始めて能く極誠無妄なることを得べきのみ。天道とは何ぞや、天地化育の理これなり。是に至て始て理の字を用ゐること正當なりとす。理とは必須遍周の勢を示せる字なり、是を以て只だ人性を保合して綱紀を正したるのみにては、之を理と稱し

難し、何となれば、其綱紀と指す所の者の外にも、亦異なる綱紀在て存するや、未だ知るべからざればなり、故に只だ其形容を指して文と謂ふべきのみ、然りと雖も文章完充して既に大和を保合するの地位に達するときは、其場合異なり、何となれば、大和は一切の事物を包括するを以て、其終始にして果して明なる上は斯綱紀の外に亦綱紀無き所以の者従て明なるべければなり。萬有の終始を明にするの業は斯道の極處なり。西洋に於て謂ふ「フィロソフ」（哲）は此の業に當れり、支那に於ては是れを理學とも曰ふ、されど上に言ふ理學即ち「サイアンス」とは別物なり。「サイアンス」に於て謂ふ所の理は只だ理の一斑にして、畫定せる形象を経て外に現るる者のみに係れり、支那の器の字に當れり。此に於て乎又斯道の能く容るゝ所、獨り西洋の理學のみに止まらずして、其哲學にも及ぶことを知るなり。是れに由て之れを觀れば、聖門の學教は既に今日に至るまでに萬化の終

始を明にすることを得たると否とは措て問はず、之を明にして極誠無妄に達せむとするものなるや昭昭たり。

第九節 保合誠なるが故に利なる事

斯道の務むる所萬物の終始を明にするに在り、故に又利なり、善なり。利とは事能く其宜を得、物能く其處を得たるの謂なり、例へば能く雨露を防ぐ是れを屋宇の利と曰ひ、能く敵を斃す是れを兵器の利と曰ふ、されど是くの如きは只だ一事に執り、一象に限るの利のみ、事の利は萬事の利を須て始めて定まり、物の處は萬物の處を以て始て決する者なり、故に先づ萬事萬物の終始に通せざれば利盡き難し。斯道美なり大なり利なり、故に又善なること證明を俟たず、是れ聖人乾元の徳を重する所以なり。

第十節 人の性命は大和を文章に現すに

在り

此に至り儒道に於て、性命といふ事の意旨を審にし得べき地位に達したり。前に屢、人性を分解して綱紀を正すの不可なることを述べたれど、其人性といひ、性情といふは保合の前に現るゝ者にして易以下に謂ふ所の性命と異なり、故に辯解を施さざれば讀者の疑を免れ難し。古來聖門に於て言ふ、性命とは天地萬物の間に立て人たる者の居るべき所といふことなり、即ち禽獸草木金石に對しては云云、祖先に對しては云云、君父に對しては云云、妻子に對しては云云、兄弟に對しては云云、朋友に對しては云云、他人に對しては云云、後世に對しては云云、天理人道に對しては云云の地位を取るべきを曰ふ。是くの如き地位は大和に順ひ綱紀に通して萬

古不易なり。大和に順ふが故に美なり、利なり、善なり。之を命といふ所以の者は他無し、人の自ら定むる所に非ず、天地萬物を俟て定まる者にして、一己の意を以て易へ難く、動かし難ければなり。之を性といふ所以の者は他無し、天地萬物を俟て定まると雖も、人生れながらにして之を知るの靈心を備ふればなり。若し是くの如き性をして果して始めより書定せる形象ある者ならしめば、綱紀を正すため之を取て分解すること正當なるべし。分解して得たる所は即ち性の理なり。是の如き理は決して無しとせず、有るは則ち有るなり、易にも「窮理盡性以至于命」といひ「昔者聖人之作易也、將以順性之理、是以立天之道曰陰與陽、立地之道曰柔與剛、立人之道曰仁與義」と見えたり。天理人道を贊明するの業にして宋儒の主として研究せし所を理學と曰ひ、又性理と曰ふも焉に出づることなかるべし。性理の字詩經の註に既に見ゆ既に性あれば從て其理無きを得ざること疑無しと

雖も此の性なる者は未だ必ずしも書定せる形象を以て外に現れざるがゆゑに、其既に現るゝ所のみを取て分解するときは則ち管見を免れざるなり。西洋人は既に現はるゝ所のみを取て分解したり、是れ形象書定せる者の理、即ち物理、化學以下の學に於て用ゐて成功せし所の討究法を以て強て人類に及ぼさむとしたるものなり。世の人悉く皆聖人なりせば、其性情に現はるゝ所を取て分解を施し、以て綱紀を正すの策と爲すこと素より其所なり、然りと雖も世の人既に皆聖人ならむには綱紀を正すことも亦無用なり。小人の性情を分解して以て聖人の道を得むと欲するものも焉ぞ得べけむや。

性命は固より利なり、誠なり、大なり、美なり、何となれば、天の命する所にして利誠大美を兼具する大和の一部分なればなり、性善の説夫れ是に據るか、然りと雖も格段なる一人一人に現るゝ所に至りては未だ必ずしも善

ならず。蓋し人種として大和の包む所に非ざるは無く、一人として斯道の納むる所に非ざるは無きを以て、萬化の際に西洋學者の所謂淘汰の理に依て月に歳に善に進まざるは無し、化醇とは其れ之れを謂ふか、スベンセル氏の愛他論は、人類の萬物と共に變遷するに際し、境遇に應接するに拙なる者は敗れ、巧なる者は榮ふるに従ひて益、善に進む次第を述べたる者なり。是れ善は則ち善なり、然りと雖も未だ至善に非ざるなり、何となれば斯く定形を備へて外に現はるゝの善は畢竟習性、の善にして原性の善に非ざればなり、其人種其一人の境遇を爲せる大和の一小局部に因て定まれる所にして、未だ天地に耻す、日月と共に明なる者に非ざるなり。習性は定形あり、故に分解し易し、然りと雖も之を分解して得る所は只た其定形の因て出でし所たる境遇の事情に過ぎず。境遇の事情若し綱紀あれば、習性も之は因て善なり、故に曰く綱紀は本なり、人性は末なりと、先

つ綱紀を正すに非ざりせば末正しからず、正しからざるの末を以て之を正す所以の本を得らむとするは豈に逆施ならずや。

習性は境遇の異なるに依て異なり、境遇は時と處とに依て同しからず、然りと雖も果して萬世不易なる者に非ざるよりは、綱紀とは謂ひ難し。されば何れの國、何れの世の人の習性に現るゝ所を以て綱紀と倣さむや、要するに習性の上に在て據て以て取捨善惡を決する所以の者有るに非ざれば、綱紀立たざるべし、原性は是れなり、原性は、大和を保合し、萬物をして各、其中正を得しめたる上にて始めて知るべきなり。既に保合したる上に得たる所の綱紀を分解して、其天下に關する者は云云、一國に關する者は云云、一家に關する者は云云、一身に關する者は云云と説き出だすは固より正當の次第なり。是れ斯道に於て謂ふ所の理學なり、西洋人の所謂理學の如く偏狹なる者に非ざるなり、保合と並ひ行はるゝ者なり、相容れ

ざる者に非ざるなり。

人の性命は其天に稟くる所の心靈に依て保合を務め天命を知て之に順ふに在り。人の保合を務め天命に順はむかため爲す所之を徳といひ、徳の迹之を文といふ。文の由て顯はるゝ所、獨り美術のみに非ず、尙ほ種種あり。君臣父子夫婦兄弟朋友の交際の間、に顯はる、禮儀これなり、故に曰く「禮者實之文也」と、禮の眞意を知らず、之を以て架空無用の物と爲すは、分解あるを知て保合あるを知らざる、洋學者流の管見のみ。文又情聲に由て顯はる、風雅頌これなり、故に曰く「治世之音安以樂、其政和、亂世之音怨以怒、其政乖」と。文又聖賢の言辭に依て顯はる、尙書の載する所これなり。文又世代の盛衰に縁て或は顯はれ、或は破る、是夫子の志、春秋に在る所以にして史記以下の歴史の本旨とする所も、大抵文運の興敗を詳にするに在り、西洋の史類と趣を異に在り至ては天地の文章、萬物の大同を叙ふる

者なること、前述の如し。文の縁て顯はるゝ所、斯くの如く夫れ駁雜なりと雖も、要するに文章の一に歸す、文章は天理人道を叙べて弘く天下に示し、遠く後世に傳ふる所以の者なり、故に曰く「道者文之根本、文者道之枝葉」と、徒に卷を儒生の門に執り、筆を翰墨の采に據るは文章の本旨に非ず、支那に於て古より文章を重するも亦故ある哉。人を擧ぐるに文章を以てする所以に在り。分解を重する、西洋人は、眞の文章なる者を解することを得ず、其撰述する所は叙事に非ざれば必ず理論なり、西洋の書言浩瀚汪洋たりと雖も、其間我が所謂文章の如く、僅僅數十言にして、意味深長、能く爲治の體を極め、君臣の義を盡すといふか如き者は絶えて見ざる所なり、况や經籍をや、彼等常に曰く、東洋人の想像に富める、實に驚かざるを得ずと、而して其所謂想像なる者は保合に淵源することなるを知らざるなり。西洋人は「ロジック」希臘のといふ字を理義といふ意味にも、理を述ぶ

る所以の論理といふ意味にも用ゆ「理學」の名稱に「ロジック」は「ロジック」ト同旨にて、然るに保合に精なる支那人は、文章といふ字を美德の意味にも筆紙上の文章の意味にも用ゆ、是れ奇遇にして奇遇に非ず、又東西文化の趣を異にする所以を見るに足るの一事のみ。

結 論

前の四節は西洋の開化、理學に依據し、理學の取る所の分解法、以て綱紀を正すに足らざることを證明す、後の六節は支那の文明、文章に根基し、文章の取る所の保合法、美なるが故に大なり、大なるが故に誠なり、誠なるが故に利なることを證明す。是に至り緒言の問題を解答して曰く、支那三千年の文化、一大失策に非ず、其能く大國を長久に維持することを得る所以の者、全く文章の保合に因ると、曰く君臣父子夫婦の道、黄色人種の妄夢に

非ず、自由平權の説、白哲人種の無文なるに因ると、曰く日本舊來の文明、西洋傳來の開化と氷炭相容れざる者に非ず、斯道の大なる、却て理學を取て其文采の著明を加へむとす、是を以て東西接合の地たる日本と吉凶を俱にせむとする者は、其漢魏に、隋唐に、宋に、明に得たる、文章の美を繼ぎ、理學の精を西洋に承けて、兩者を保合し、以て此に古今無比、東西未曾有の一大隆盛の基を開かざるへからずと。保合の學、之を文學と曰ふ、斯學に於て此の業に任する次第の如きは之を別冊に譲る。